

三雲・井原遺跡Ⅱ

— 南小路地区編 —

福岡県前原市大字三雲・井原所在遺跡の調査報告

前原市文化財調査報告書

第 78 集

2 0 0 2

前原市教育委員会

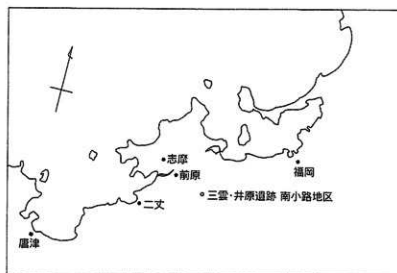
三雲・井原遺跡Ⅱ

— 南小路地区編 —

福岡県前原市大字三雲・井原所在遺跡の調査報告

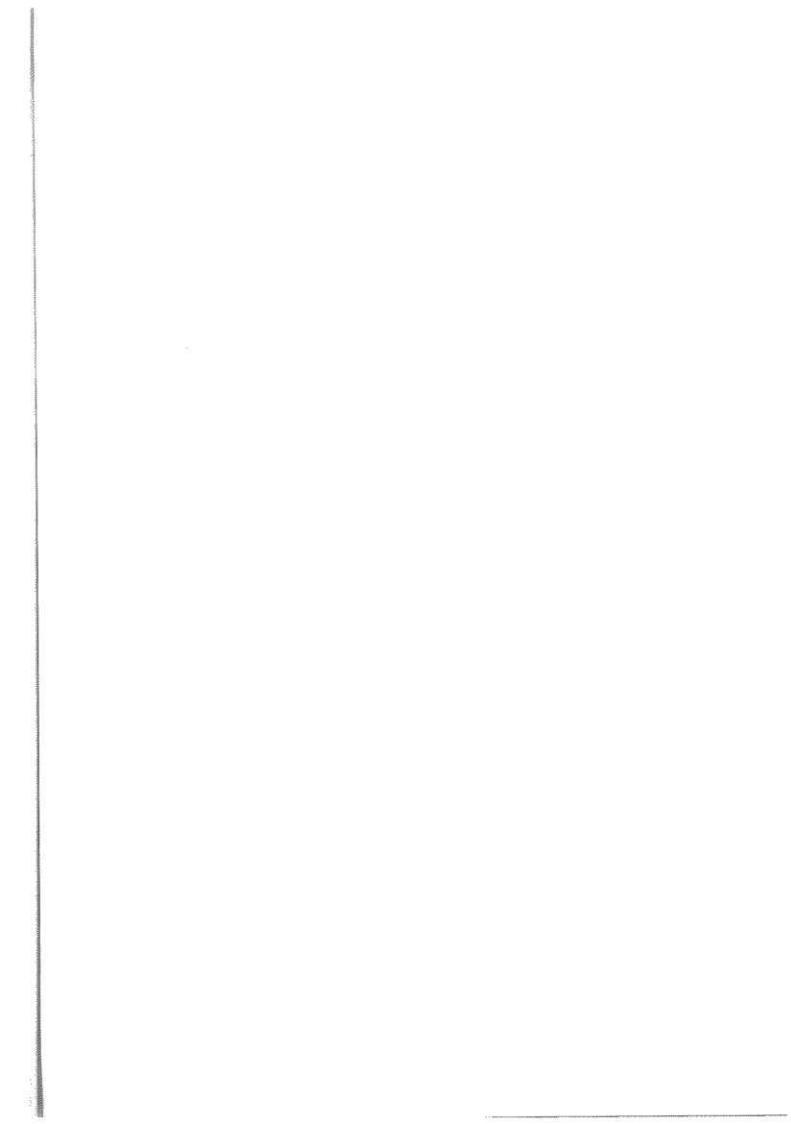
前原市文化財調査報告書

第 78 集



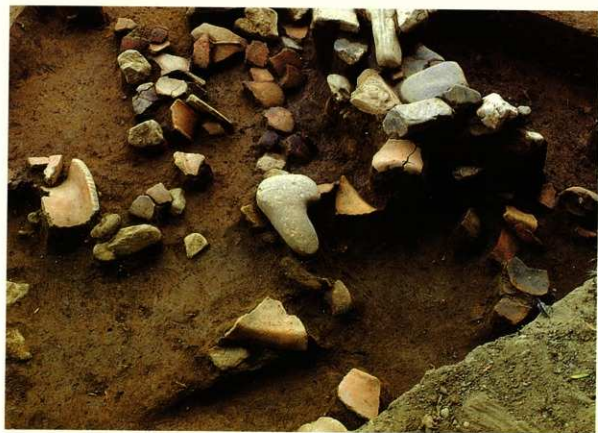
2002

前原市教育委員会

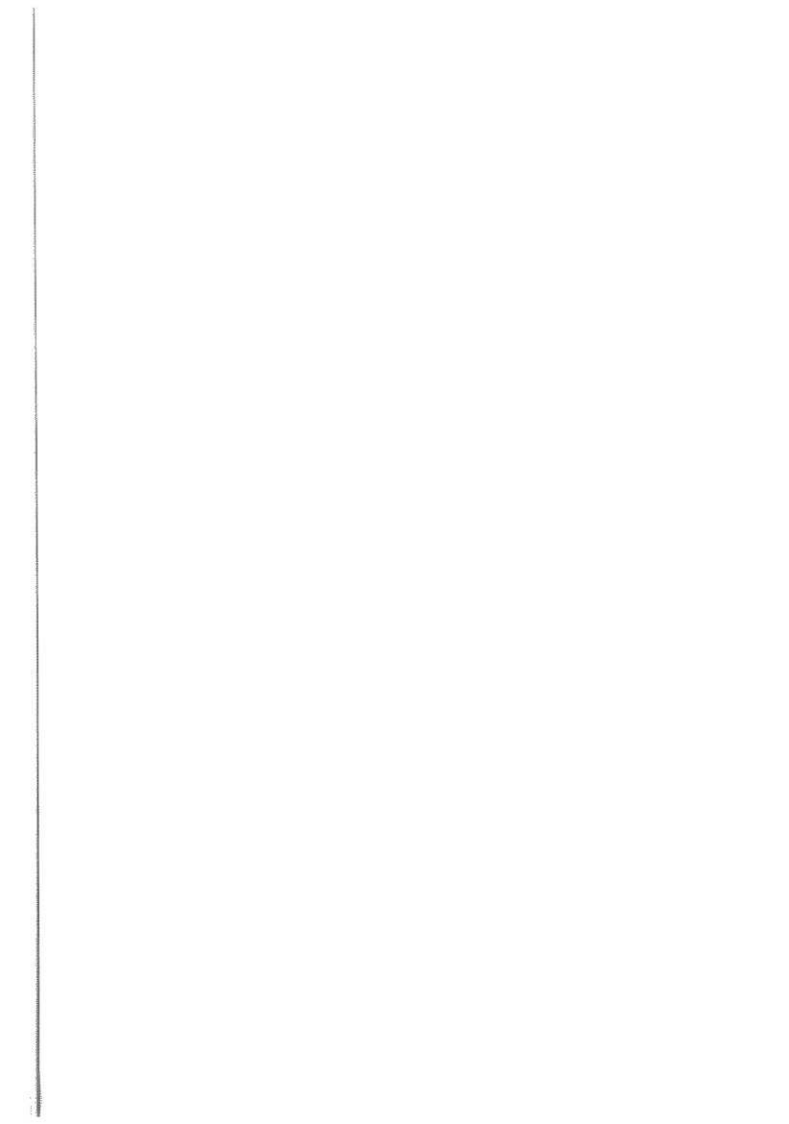




a 南小路地区455番地1号溝発掘状況

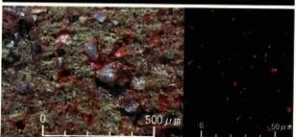
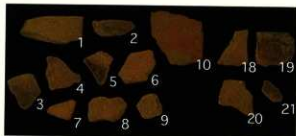


b 南小路地区455番地1号溝遺物出土状況





a 南小路地区455番地1号溝出土石杵



b 南小路地区455番地1号溝出土水銀朱付着土器



c 南小路地区出土玉類



d 南小路地区470-2番地出土鉄状銅製品 (約2倍)



序

前原市は悠久のむかし、わが国と東アジア諸地域との交流拠点として栄えた伊都国の所在地として広く知られており、市内には当時の繁栄を伝える埋蔵文化財が数多く眠っています。

なかでも、伊都国の拠点集落である三雲・井原遺跡は「魏志倭人伝」が伝える世々王の住む都として栄えたとされ、三雲南小路、井原縄溝、平原の三王墓は伊都国の繁栄を如実に示すわが国第一級の遺跡と自負しています。

本市では、平成6年度から伊都国の拠点集落である三雲・井原遺跡の国史跡指定に向けて遺跡の範囲確認調査を実施してきました。また、平成10年11月には三雲・井原遺跡の保存と活用を中心に据えた前原市内文化財整備基本計画を策定し、将来の史跡指定、本格整備に備えているところで

す。平成12年度の発掘調査では伊都国最古の王墓である三雲南小路遺跡の周囲に区画溝がめぐることを確認し、弥生時代最大級の王墓であることが判明し、遺跡の解明に大きな進展がありました。

本書ではこれら平成12年度の調査結果を中心に、近年、南小路地区で実施された発掘調査の成果をまとめたものです。本書が伊都国の王都である三雲・井原遺跡解明の一助となれば幸いです。

平成14年3月29日

前原市教育委員会
教育長 菊竹利嗣

例言

1. 本書は福岡県前原市大字三雲1264番地他に所在する遺跡の調査報告書である。
発掘調査は平成12年度、遺物整理と報告書の作成は平成13年度にそれぞれ国庫補助を受け、前原市教育委員会が実施した。
2. なお、469番地、1264番地の一部は平成11年度以前に測るが、遺跡の性格をより詳細に把握するため、本書で一括して報告する。
3. 本書に使用した1/2,500、1/5,000地形図は前原市都市計画図（昭和60年度、平成10年度作成）を使用した。
4. 本書に使用した遺構実測図および写真撮影について436番地、1264番地、1265番地は、岡部裕俊、455番地は岡部、上田健太郎（現兵庫県教育委員会）、435番地、470-2番地は、岡部、牟田華代子が、469番地は瓜生秀文、角浩行（前原市教育委員会）が行い、発掘現場の空中写真撮影については、(有) 空中写真企画（代表 檀睦夫）に委託した。
5. 遺物実測は山崎賀代子、島影やよい、川上辰子、牟田、岡部が行った。
6. 遺構図の製図は友池真由美、岡部、牟田が、遺物図の製図は牟田、岡部が行った。
7. 本書の執筆分担は本文目次に記載している。
8. 本書の編集は牟田、岡部が行った。
9. 本書で報告した遺構、遺物図、記録写真、出土遺物は一括して伊都歴史資料館で保管、管理する予定である。

本文目次

I. はじめに	(岡部)	1
1. 調査にいたる経過		1
2. 調査の組織		1
II. 調査の記録		2
1. 位置と環境	(岡部)	2
2. 1264番地(里道)	(岡部)	5
(1) 調査区の概要		5
(2) 1トレンチ		5
3. 455番地	(岡部)	7
(1) 調査地点の概要		7
(2) 1区		8
(3) 2・3区		22
4. 435番地	(牟田)	25
(1) 調査地点の概要		25
(2) 弥生時代の遺構と遺物		26
(3) 古墳時代の遺構と遺物		31
5. 436番地	(岡部)	33
6. 1265番地	(岡部)	33
7. 1264番地(市道)	(岡部)	35
(1) 調査地点の概要		35
(2) 遺構の概要		35
8. 469番地	(瓜生)	41
(1) 調査の概要		41
(2) 遺構の概要		41
9. 470-2番地	(牟田)	45
(1) 調査の概要		45
(2) 住居		46
(3) 土壇墓		47
(4) 土坑		50
(5) その他の遺構		51
10. 出土石器、鉄器、玉類	(牟田)	53
11. 出土品の自然科学分析結果		55
(1) 三雲南小路遺跡出土遺物の保存科学的調査について	(比佐陽一郎)	55
(2) 前原市三雲南小路遺跡出土赤色顔料について	(本田光子)	57
III おわりに	(岡部)	59

図 版 目 次

- 図版1 a 1264番地(里道)調査地点全景
b 同上(東から)
- 図版2 a 1トレンチ(南から)
b 2トレンチ(東から)
c 3トレンチ(東から)
- 図版3 a 455番地全景(真上から)
b 同上(北から)
- 図版4 a 1号溝北西コーナー上層遺物出土状況
b 同上 石柁出土状況近景
- 図版5 a 1号溝a・bトレンチ土器出土状況
b bトレンチ大型壺胴部出土状況
c 同上 石製紡錘車出土状況
- 図版6 a 1号溝a・bトレンチ上層土器出土状況
b 1号溝aトレンチ土層断面
- 図版7 a 古墳時代祭祀土坑上層土器出土状況
b 古墳時代祭祀土坑下層土器出土状況
c 1号溝bトレンチ土層断面
- 図版8 a 甕棺墓出土状況(北から)
b 同上(東から)
- 図版9 a 2区土墳墓
b 2区集石遺構
- 図版10 a 3号溝遺物出土状況
b 同上近景
c 3号溝土層断面
- 図版11 a 435番地調査地点全景(北西から)
b 同上(南東から)
- 図版12 a 方形土坑検出状況
b 烏足状タタキ韓式土器出土状況
c 土師器甕出土状況
- 図版13 a 東溝土器溜り常生土器出土状況(北西から)
b 同上(北から)
- 図版14 a 東溝西岸付近土層断面
b 東溝中央、北壁土層断面
c 東溝土層断面
- 図版15 a 436番地トレンチ全景
b 1265番地トレンチ全景
c 同上 南壁土層断面
- 図版16 a 1264番地(市道)全景(西から)
b 同上 近世溝完掘状況(北から)
- 図版17 a 1号住居(南から)
b 1号住居カマド周辺土器出土状況
c 3号住居(北西から)
- 図版18 a 4号住居(北から)
b 4号住居炭化木、土器出土状況
c 1号土坑(北から)
- 図版19 a 9・10・11号住居(南から)
b 9号住居(南から)
- 図版20 a 9号住居土器出土状況①(北から)
b 9号住居土器出土状況②(西から)
c 9号住居土器出土状況③
- 図版21 a 469番地Ⅱ区全景(上から)
b 1号焼土坑
c 2号焼土坑
d 3号焼土坑
e 4号焼土坑
- 図版22 a 集石遺構
b 470-2番地全景(西から)
- 図版23 a 1号住居(西から)
b 2号住居(西から)
- 図版24 a 1号土墳墓(東から)
b 2号土墳墓(北から)
c 3号土墳墓(北から)
- 図版25 a 1号土坑土器出土状況(東から)
b 2号土坑(西から)
- 図版26 出土遺物①(455番地)
図版27 出土遺物②(455番地)
図版28 出土遺物③(435番地)
図版29 出土遺物④
(1264番地(市道)・470-2番地)
- 図版30 出土遺物⑤

挿 図 目 次

第1図	三雲・井原遺跡の範囲と主な出土品 (1/7,500)	3	第32図	1264番地(市道)出土土器実測図 (1/4)	39
第2図	南小路地区周辺的主要調査地点(1/5,000) ...	4	第33図	469番地調査地点平面図 (1/100)	42
第3図	1264番地(里道)1トレンチ実測図(1/40) ...	5	第34図	焼土坑・集石遺構実測図 (1/20)	43
第4図	1264番地(里道)2・3トレンチ実測図 (1/40)	6	第35図	469番地出土遺物実測図(1/4)	44
第5図	455番地・1264番地トレンチ位置図 (1/125)	7	第36図	470-2番地遺構平面図(1/100)	45
第6図	455番地1区の遺構配置図(1/40)	9	第37図	1・2号住居実測図(1/60)	46
第7図	455番地1区土層断面図(1/40)	11	第38図	2号住居出土甄状銅製品実測図(1/1) ...	47
第8図	455番地1区土器出土状況実測図(1/30) ...	13	第39図	1・2・3号土壇壘実測図(1/30)	48
第9図	1号溝出土土器実測図①(1/4)	14	第40図	1・2号土坑実測図(1/20)	49
第10図	1号溝出土土器実測図②(1/4)	15	第41図	1号竈立柱建物実測図(1/60)	50
第11図	1号溝出土土器実測図③(1/4)	16	第42図	砥石出土ピット実測図(1/20)	51
第12図	莨菪窟実測図(1/20)	17	第43図	470-2番地出土土器実測図(1/4)	52
第13図	莨菪窟実測図(1/6)	18	第44図	南小路遺跡出土鉄器・玉類実測図 (1/2, 2/3)	53
第14図	莨菪窟外溝葬石棺土実測図(1/2)	18	第45図	南小路遺跡出土土器実測図(1/3, 1/2) ...	54
第15図	古墳時代祭祀土坑土器出土状況実測図 (1/20)	19	第46図	南小路470-2番地出土甄状銅製品の成分分析	55
第16図	古墳時代祭祀土坑出土土器実測図(1/4他)	20	第47図	三雲南小路遺跡遺構配置と断面概略図 (1/400)	60
第17図	3号溝出土遺物実測図(1/3)	21			
第18図	2・3区遺構実測図(1/40, 1/20)	22			
第19図	土壇壘実測図(1/20)	23			
第20図	集石遺構実測図(1/20)	24			
第21図	435番地遺構配置図(1/60)	25			
第22図	東溝内土層断面図(1/40)	26			
第23図	東溝内土器出土状況実測図(1/30)	27			
第24図	東溝内出土土器実測図①(1/4)	29			
第25図	東溝内出土土器実測図②(1/4)	30			
第26図	435番地方形土坑実測図(1/20)	31			
第27図	435番地方形土坑出土土器実測図(1/4) ...	32			
第28図	1265番地遺構平面図及び断面図(1/40) ...	34			
第29図	1264番地(市道)遺構平面図(上段、下段) (1/120)	36			
第30図	1・3・4・5・9号住居実測図(1/40) ...	37			
第31図	1号土坑実測図(1/20)	38			

表 目 次

第1表	三雲470-2番地出土甄状銅製品の分析表	56
第2表	赤色顔料が付着した土器	58

付 図 目 次

付図	三雲南小路遺跡調査地点位置図(1/250)
----	-----------------------

I. はじめに

1. 調査にいたる経過

三雲・井原道跡は中国の史書「魏志倭人伝」に記された伊都国の拠点集落として著名な遺跡である。これまで限られた面積での発掘調査にもかかわらず、遺跡内から多くの重要遺物、外来系遺物などが出土し、まさに「王都」たる趣を醸しだしている。

市教育委員会では、来るべき当該遺跡の史跡指定にむけて遺跡の範囲および構造の詳細を確認するため、平成6年度から継続して発掘調査を実施している。平成7年度には三雲遺跡等調査指導委員会も発足し、調査指導体制の充実化を図った。

平成11年度に開催された調査指導委員会では三雲・井原道跡の範囲を確定することに重点を置き、①寺口、八龍地区で確認された環濠と目される大溝の延長方向の調査。②伊都国王墓とされる三雲南小路遺跡の範囲と形態ならびに井原窪溝遺跡の所在地の特定。③屋敷、井ノ川地区周辺における青銅器等铸造工房の確認、の三本を柱とすることが確認され、県教育委員会文化財保護課と協議しながら平成12年度の調査地点を設定し、地権者との交渉の後、発掘調査を実施した。

平成12年度には、上記課題のうち、特に三雲南小路遺跡の墓域を推定する上での新発見が得られたため、平成13年度にかけて南小路地区の調査成果を報告することとした。

なお、調査にあたっては三雲455番地の地権者である窪友雄さんご夫妻、435、436番地の窪義孝さん御一家には発掘調査を快諾いただきました。また、平山郡一三雲行政区長には調査にあたっての地元地権者との調整等に御配慮を賜りました。篤く感謝の意を表します。

2. 調査の組織

平成12年度ならびに13年度における発掘調査体制は以下のとおりである。

調査主体 前原市教育委員会

調査指導委員会	委員長	横山浩一
	委員	西谷 正 坪井清足 小西龍三郎 町田 章 柳田康雄（～平成12年9月） 橋口達也（平成12年10月～）
総 括	教育長	三嶋利彦（～平成13年6月） 菊竹利剛（平成13年6月～）
	教育部長	有田種之（平成12年度） 上田勇介（平成13年度）
	文化課長	松井 昇
	文化課参事	小池史哲
	文化財係長	林 寛
庶 務	文化振興係長	藤井正信（平成12年度） 児玉照代（平成13年度）
	主 事	浜地 克
調 査	文化財係主査	岡部裕俊
	主 事	上田健太郎（平成12年4月～同年9月）
	嘱 託	牟田華代子（平成12年11月～）

II. 調査の記録

1. 位置と環境

三雲・井原遺跡は前原市の中心部から南西に約7km。瑞梅寺川水系の瑞梅寺川、川原川によって形成されたなだらかな扇状地形の中央部に位置する集落遺跡である。これまでの調査によって縄文時代～中世までの長期にわたり遺跡が営まれたことが判明している。

なかでも弥生時代の遺跡は西を瑞梅寺川、東を川原川という2本の河川とその氾濫原に挟まれた標高30～44m、概ね南北700m、東西500mの広い範囲に展開する。

遺跡は扇状地上に営まれたため、遺構面の土質は変化に富み、南小路地区など南部の高所では黄色の粘質土が多くみられるが、多くは、褐色土層に礫層が絡んだ複雑な様相を見せ、狭い調査区では隣接地でも全く違った土壌堆積を示す場合も多く、調査担当者の頭を悩ませることが多い。

これまでに計90ヶ所におよぶ調査が実施されたが、多くはトレンチによる確認調査であったため、遺跡構造、規模など詳細解明にはいまだ少し時間が必要である。とはいえこれまでの調査成果からも伊都国の拠点集落であることを示す資料は豊富に出土しており、集落の構造についてもその輪郭が浮かび上がってきたことも事実で、弥生時代～古墳中期の集落、墓地の変遷、青銅器生産等のエリアについて、概要把握に努めており、今後その確認検証作業が必要である。主な出土遺構、遺物の出土地点は第2図に示しておいた。なかでも特筆されるのが、伊都国王墓とされる三雲南小路遺跡の所在確認であった。

三雲南小路遺跡の発見は1822（文政5）年に銅剣、銅戈、朱入り的小壺とともに、特大サイズの甕棺（1号甕棺）の中から銅鏡35面、銅矛大小2口、勾玉1個、管玉1個、重ねた銅鏡の間に挿んだガラス壺などが発見されたことによる。

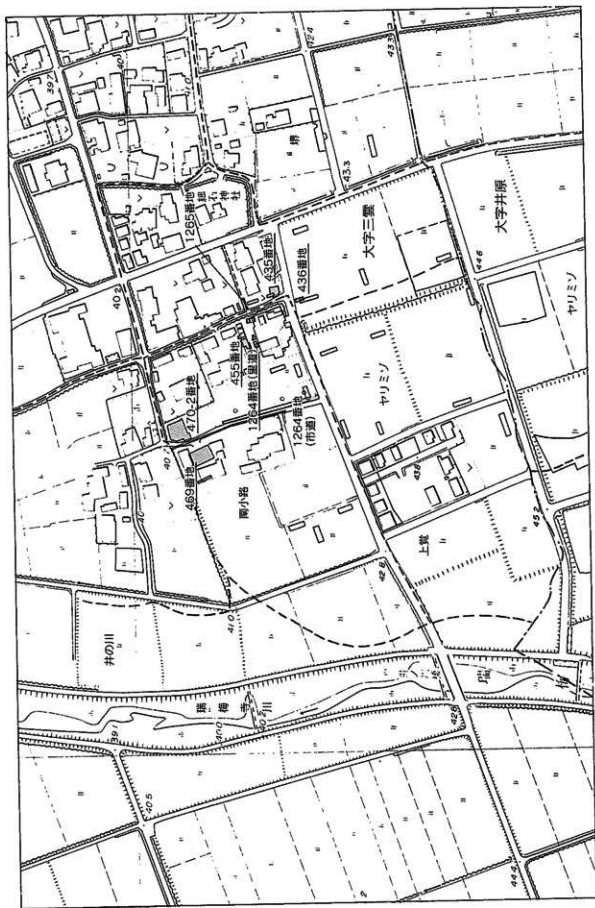
1974年から翌年にかけて福岡県教育委員会の発掘調査によってその所在地が確認され、さらに1号甕棺の隣からもう1基の特大サイズの甕棺（2号甕棺）が発見され、銅鏡22面以上、ガラス勾玉、管玉、靱玉製勾玉などが出土した。調査を担当した柳田康雄は2基の甕棺の被葬者について副葬遺物の違いから1号甕棺を王墓、2号甕棺を妃、ないしは巫女王と推定し、さらに西側で検出した溝状遺構について墓域を区画する区画溝の一部と推定した。この溝については、平成6～7年度に市教育委員会が行った調査によって南北長20m以上で、さらに北に延びていることを確認することとなったが、いわゆる区画溝であるか否かの確定にはいたらなかった。

平成12年度の調査は上記溝の延長方向を確認し、区画溝の有無の確認とこれに伴う墓域の確定が大きな課題となったのである。

ところで、遺跡は長く「三雲遺跡（群）」と呼ばれていたが、近年の調査で遺跡の範囲が三雲地区から井原地区にかけて連続して分布することが明らかになり、「三雲・井原遺跡群」と総称されるにいたった。しかし、冒頭に述べたように遺跡の範囲が広大で、かつ長期にわたり展開することから、特に弥生時代～古墳時代前半期にかけてのいわゆる「伊都国」前後の集落域については前者とは峻別し、「三雲・井原遺跡」と呼称する。調査地点の呼称については1974年当時に使用されていた小字を用いた標記をそのまま継承し、〇〇地区と標記し、地番を付記することとする。ただし、伊都国王墓とされる三雲南小路遺跡、井原鏡溝遺跡については、その呼称が一般に通用しており、無用な混乱を避けるため、個々の墓遺構に限定してその呼称を用いることとする。



第1図 三雲・井原遺跡の範囲と主な出土品 (1/7,500)



第2図 南小路地区周辺の主要調査地点 (1/5,000) (薄アミかけ部分が既調査地点、濃アミかけ部分が本報告書報告地点)

2. 1264番地 (図版1・2、第3・4図)

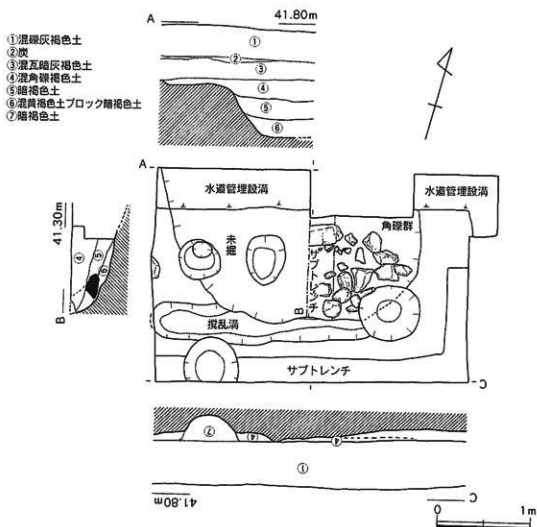
(1) 調査区の概要

1264番地は三雲南小路遺跡の北に隣接する里道である。1、2次調査で確認した溝の延長方向を確認するため、西から順に1～3の3本のトレンチを設定した。

里道下北寄りには上水道管が埋設されていたため、安全を期して人力で掘削作業を行った。2トレンチでは数個のビットとともにトレンチ西側で深さ20cmほどの段落ちを検出し弥生土器が少量出土した(第4図)。3トレンチでは、第1次調査で検出した近世溝の延長を確認した(第4図)。

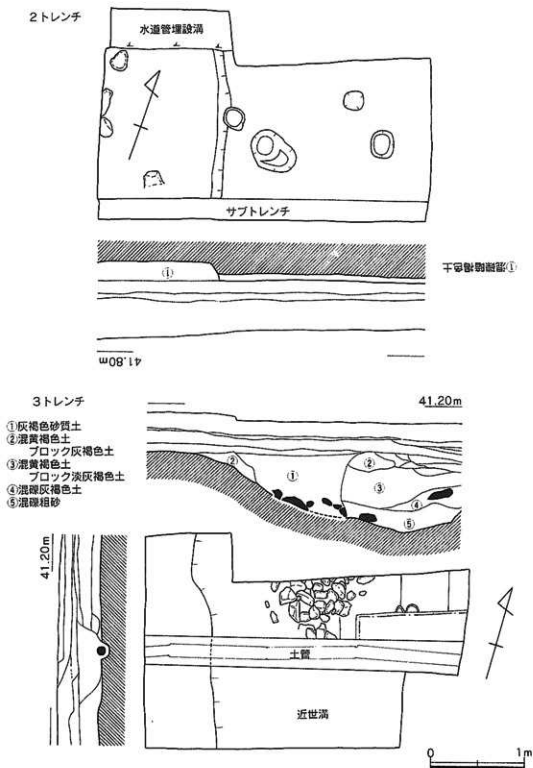
(2) 1トレンチ

1トレンチは第2次調査で検出した1～3号溝の真北に位置する。現表土下50cmで弥生時代の遺構面である暗褐色土層となった。中央部が若干暗茶褐色にぼんやりと汚れていたため、少し掘り下げたところ幅2.7mの半円形の溝状の落ち込み(1号溝)を検出した。上水道埋設溝で遺構の東西



第3図 1264番地(里道)1トレンチ実測図(1/40)

断面を観察したところ（第3図①）、暗茶褐色の沁み状の土層は深さ5～6cmの浅い掘り込み面で西端から80cmほど続き、途中で急激に深くなっていった。最深部では深さ60cmに達する。道構の南北断面観察のために掘ったサブトレンチ（第3図B）では道構は掘り方から急に深くなっていた。



第4図 1264番地（里道）2・3トレンチ実測図（1/40）

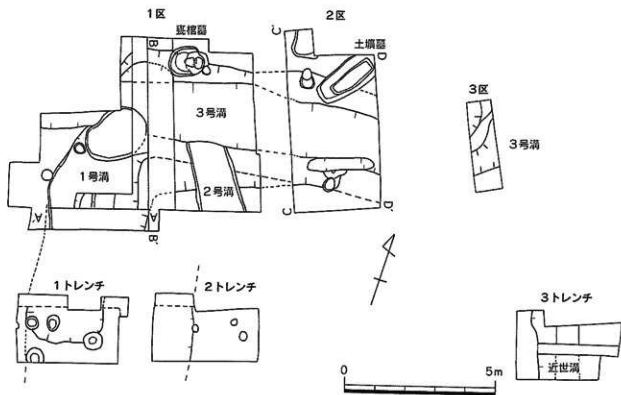
遺構上層の東半部では拳～人頭大の角礫が出土した。同様に角礫は1号溝の南北サブトレンチ内でも多く出土し、底面付近からも出土している。角礫は溝埋土の東半部に多く包含される傾向がうかがえる。埋土から弥生土器片が少量出土した。

3. 455番地

(1) 調査地点の概要

1264番地の1トレンチで検出した落ち込み(1号溝)が北に向かって続いており、その位置、方向ともに第1次、2次調査で確認した溝状遺構の延長方向に一致することから、その一部である可能性が高いと判断され、その概要を把握するため455番地でも発掘調査を行なう必要が生じてきた。455番地は窪友雄氏所有の宅地で、広い敷地の中、幸い母屋、倉庫など建物は北側に集中し南側は野菜畑、資材置き場として利用されていた。そこで、窪氏に宅地内の調査の実施目的について説明し、協力をお願いしたところ快諾いただき、宅地南側の野菜畑の調査に着手することができた。

調査にあたって、1264番地と455番地の境界に植の木の並木があり、境界近くを掘り下げるができなかったので、まず1トレンチの北4mに東西方向のトレンチを設定し1号溝の延長方向の確認作業を行った。調査区の基本層位は耕作土、遺物包含層下に薄い近世遺構面を経て、弥生～古墳時代遺構面に達した。トレンチの断面に1号溝を確認した(第5図①)。しかし、遺構面が暗褐色で狭いトレンチでは溝の平面プランの確認は難しいと判断し、トレンチを北に拡張し、調査区を広げて面的に調査を実施することとした(1区)。溝はトレンチ南端から1.5mの地点で東に向



第5図 南小路455番地(1~3区)・1264番地(1~3トレンチ)位置図(1/125)

かって屈曲し、6mの地点では方向を完全に東に向け、1・2号甕棺墓を囲むようにめぐるように東にむかってめぐることを確認した。

そこで、1区の東側に新たに2本のトレンチを設定し(2区、3区)、溝の延長方向を確認したが、2区では溝の痕跡を確認できたものの、3区では溝を検出することができなかった。溝の他1区からは甕棺墓、2区からは土壙墓、集石遺構を検出した。また、1号溝と併行して東西に伸びる近世溝が1～3区から出上した。また、2区の近世柱穴からは文字を陽刻した石製品が出土した。

(2) 1区

① 弥生時代の遺構と遺物

1号溝 (図版3、第6・7・8図)

1264番地から連続する溝である。遺構は古墳時代の土坑や近世の溝など、後世の遺構と切りあい、一見してもそれとは確認しづらい状況であったが、調査区の北西部で黄褐色砂質土の地山に切り込んだ周溝のコーナーを検出し、そこを足かりとして南と東に向かってプランの確認を行い、ほぼその延長方向を確認することができた。

溝は調査区の南西から北に1.5mほど伸びた後、北東方向に45度ほど偏り、さらに5mほどいったところでさらに東向きに折れ、完全に東に向きを変えてさらにのびることが確認できた。溝幅はaトレンチ付近で幅3.4m、bトレンチ付近で4.0mほどを測る。

ただし調査区の南東部は茶褐色混雑暗褐色土が地山となっていたため、溝の掘り方が北側ほど明確ではなく、礫の遺存状況や土器出土状況などを手がかりとしながら溝の落ち際を推定した。将来のより広い緻密な調査の実施により、土質の変化が詳細に把握できれば溝の平面プランはより明確になるものと考えられる。

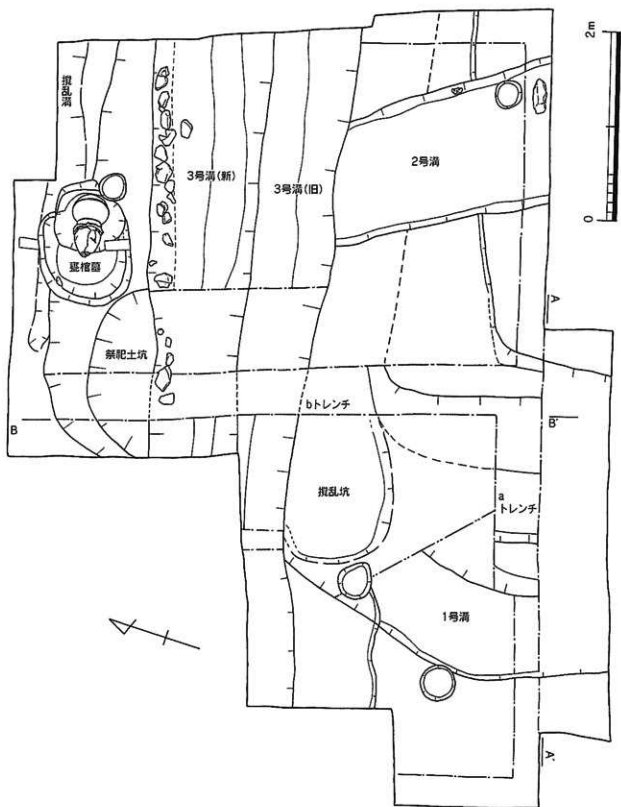
溝の見かけの深さは西から東に向かって徐々に浅くなっていったが、これは原地形が西から東に向かって緩やかに下っているためで、溝底面の深さは標高40.5m前後でほぼ一定であった。

ところで、溝の埋土中に大量の土器が包蔵されていることは、遺構面を確認した時点で確認されていた。しかし、今回の調査では溝の延長方向の確認を主としたため、調査では平面プランの検出にとどめ、溝内部の調査は溝の時期決定のための資料を得るために溝の北西コーナーに東西(a)、南北(b)2本のサブトレンチの掘削による必要最小限にとどめることとした。

aトレンチ(第7図①)は、最初の溝確認のためのトレンチを拡幅した。土層観察では溝の西岸に浅い一段目の掘り込みがあり、中途から急に深くなっていった。

溝の最深部は外縁から1.8mの地点にあり、その深さは標高40.5mである。そこから東岸に向かって徐々に浅くなり、岸部から急に立ちあがる。溝の埋土は茶褐色土のみで、細かな分層はできず、大きく3層に分けた。下層は土器を殆ど含まない。中層は土器片をやや多く含む、土器は小片が多く、遺存状態が良好なものは少なかった。溝の西岸近くにある浅いテラス面と深まりとの関係について、そのテラスは1264番地でも確認していたが、これが本来の溝の形状であるのか、溝の掘り替え、祭祀土坑の新たな掘削によってできたものなのか、土層観察では結論を下すことはできなかった。

bトレンチは中央から北部にかけて古墳時代前期の祭祀土坑と、近世溝によって大きく削られ、ていた。溝の断面は逆台形で、最深部は標高40.52mである。断面の土層は煩雑な切合いにより



第6図 455番地1区の遺構配置図 (1/40)

a トレンチよりもさらに分かりにくい状況であったが、弥生後期土器を多量に包含する上層から中層、土器を殆ど含まない下層と3層に大別される状況は概ねa トレンチと同じである。しかし、a トレンチで確認した外岸のテラス面は個々では確認することができなかった。

出土土器について、上層には、一部に古式土師器が混入しているものの、弥生後期前半の土器が大半を占めていた。遺物の多くは破断面が磨耗した小片が多いが、溝中央付近では1、7、14など、比較的原形をとどめた、あるいは原形に復元できる土器も確認している。7は底部を打ち欠いて廃棄されたもの。15は上層の下面に胴部中位を打ち欠いて環状にしたものを据え置いた状態(図版5b)であった。また、25は散乱していたものを接合すると全体の3分の2ほどまで復元することができた。

中層からは少量の土器に混じて結晶片岩製の紡錘車が出土している。

2本のトレンチの成果を踏まえ、テラス面の時期を検討するため、a トレンチ北西部を一部扇形に掘り下げ、遺物の出土状況について調査した。その結果、大型広口壺の口縁片(14)がまともに出て出土するとともに、テラスの中央部から完形の石杵が横たえて置かれた状態で出土した。

土器の出土状況について、1号溝の中でも概して2本のトレンチとその周囲から特に多くの土器が出土した。これは1号溝のコーナーに後期前半の祭祀土器廃棄坑が掘られたとみられること、北岸付近が3号溝によって大きく削られていることや北東部では溝の残り自体が悪かったことも手伝って、土器がa、b トレンチ周辺に集中的に出土したものと推定される。

出土土器の大半は上・中層のものである。取り上げ段階で、上層と中層に厳密に分層して取り上げられたわけではないため、断言することはできないが、出土量は上層からの出土が圧倒的に多い。下層からは土器の出土量はわずかであった。出土土器の時期は、弥生中期後半のものを僅かに含むが大半は弥生後期前半のものである。また、上層では一部古式土師器の混入も認められるが、1号溝を切って掘られた古墳時代の祭祀土坑の遺物が一部混入するなど、現地での他遺構出土品の混入も考慮に入れなければならない。

出土土器 (図版26・27、第9・10・11図)

壺 (1~13・35・36・38・39) 1、2、7はいずれもb トレンチ南部上層からの出土である。破断面の痛みが少なく破片もそろっており、各土器片も大きいことから、出土地周辺で破砕されたものと推定される。

1は、復元口縁径24.4cm。胴部最大径26.2cmを測り、胴部最大径が口縁径よりやや大きい。

2も1と同形である。胴部最大径は27cmを計る。

3、5は大型である。

6、8、9は胴肩部が大きく張るタイプである。

7は、小型甕で底部を打ち欠きにより欠失する。口縁径15.1cm、胴部最大径17.2cmを計る。

10、35、36、39、は下層からの出土である。10は平底で、外面は細かいハケ、内面はナデにより仕上げる。胴部の立ち上がりは急である。36は口縁部で、胴部から横方向に向かって大きく反転する。35は胴が張り、やや口縁は上方に立ち気味となる。

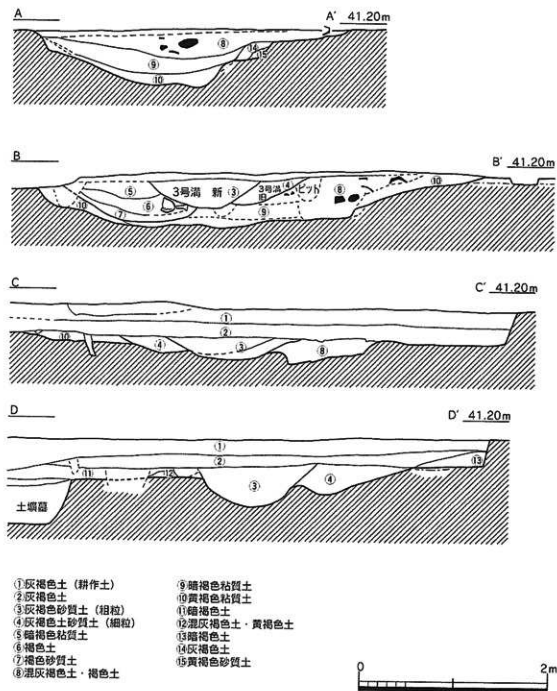
壺 (14~34・37)

14は大型の広口壺で、a トレンチの北西拡張区からの出土である。復元口縁径44cm。外面口頸部には丹が塗られている。頸部には縦方向のヘラ研ぎが暗文状に施される。15は大型壺の胴中央

部である。しっかりした二条の「コ」の字形突帯を有す。実測図ではやや胴部が立ち上がりすぎか、14と15は同一個体である可能性がある。

16は異形の壺形土器で、bトレンチ中央部上層の最下部から出土した。復元器高27.0cm、胴部最大径25.0cm、口縁径19.8cmを測る。平底の底部から直線的に上外方に立ち上がり、形部は丸みをもっている。口頸部は短く反転、外反する。口唇部は厚く、かつ外に向かって丸く肥厚する。器壁が全体的に厚く、内底面とも粗い縦、斜め方向へのハケ、ナデ等で仕上げる。

胴下半部は底部から直線的に立ち上がり、中位で不明瞭な段をもつ、あたかも型押しによって成



第7図 455番地1区土層断面図 (1/40) (薄アミ部分は1号溝埋土)

形したようである。胴下半部は加熱を受けて赤変し、器表が劣化、剥落している。

17も異形の壺である。復元口縁径14.3cm。胴部最大径は比較的胴の下方にあり、なで肩で口頸部は短く内径気味に直立する。胴部から頸部にかけてのつくりは粗いが、口唇部のみ丁寧なヨコナデで丸く仕上げられる。18・19は無頸壺である。18は復元口縁径9.3cm。19は10.6cmを測る。いずれも口頸部はくの字状に外反する。

21・23・37は袋状口縁壺である。23は上層からの出土で、口縁最大径16.3cm。口縁最大径部に稜を有する。37はaトレンチ下層から出土した小型壺で、口縁最大径8.5cm。口縁最大径部に浅い1条の沈線がめぐる。屈曲部の稜を意識したのであろうか。

20・22・24はトレンチ上層からの出土で、弥生時代終末～古墳時代前期の資料である。20は小型丸底壺である。復元口縁径9cm。胴部はやや縦長である。22・24は複合口縁壺片で、22は復元口縁径22cmで口縁が大きく外に開き、胴部最大径より大きくなるタイプと推定される。

鉢(25) 25はbトレンチ上層の中央部から出土した。破砕していたが、周辺土器と接合し、現在、全体の3分の2程度まで接合復元されている。土器片は他と比較して大きく破断面もしっかりしていることから、出土地点付近で破砕、廃棄された可能性が高い。器高28.4cm、復元口縁径29.8cm、底径9.0～9.6cmで平底の底部から内湾気味に立ち上がり肩が張り口縁部は「く」の字状に反転する。口縁部下に三角突帯がめぐる。外面及び口縁内面は横ハケ、内面はナデ調整で仕上げられる。土器の胴下部に少なくとも1個、穿孔が施されており、破断面にも穿孔の痕跡が認められることから、複数箇所に穿孔されていた可能性が高い。

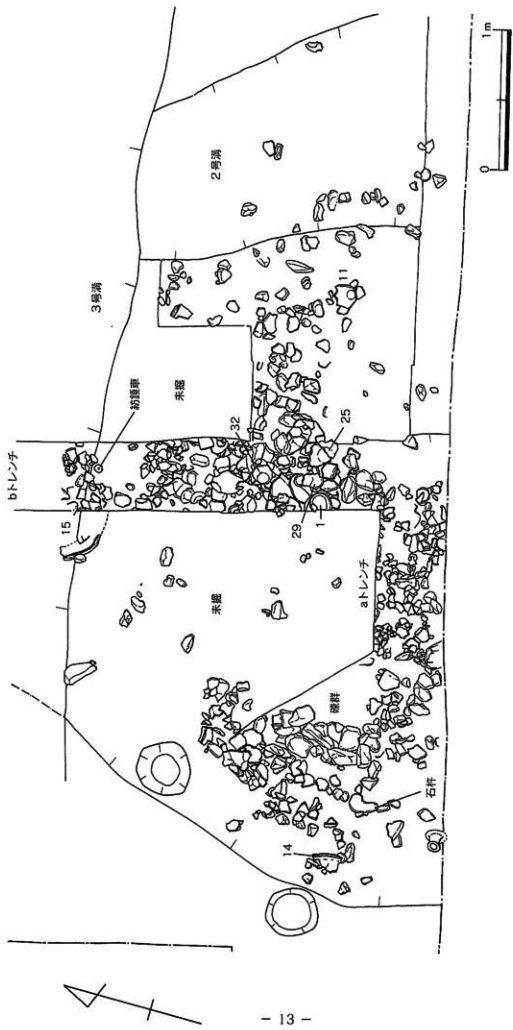
この土器の特筆すべきことは、土器の内面全体に水銀朱が付着していることである。土器のひびに朱が付着しており、破断面の観察からも土器内面の亀裂などから胎土の奥深くまで染み込んでいるのが確認できる

また、口縁部では朱が外縁に垂れたように付着する。外面体部には朱の付着は認められないことから器表面に塗布したものではないと考えられる。液体状の朱が保管されていたのであろうか。

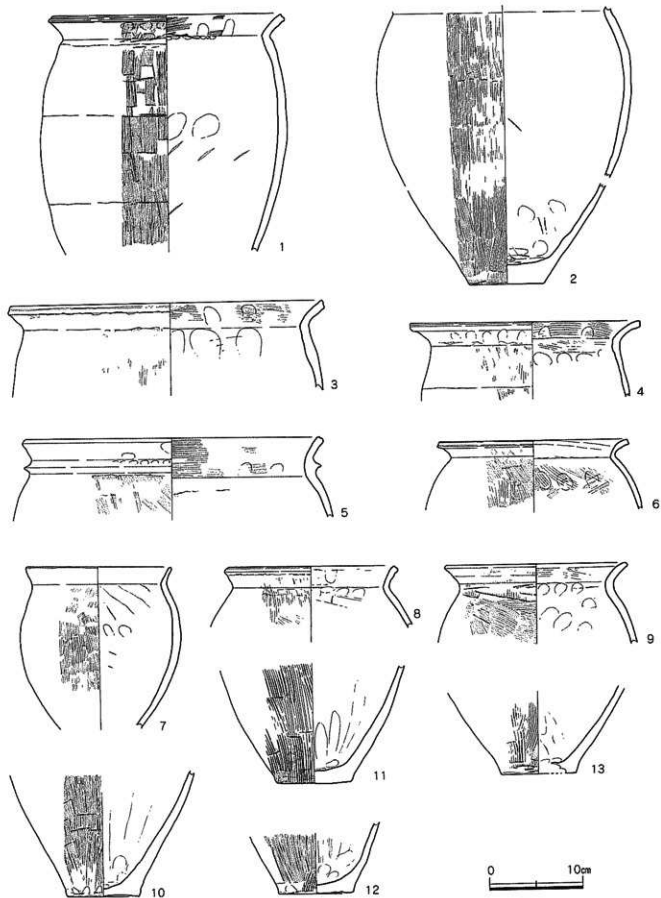
この他にもbトレンチ埋土や、455番地の耕作土から採取した土器片からも朱が付着した土器片が、30片近く出土し、中には内面丹塗りの甕、内外面ともに朱が付着する器形が不明の土器片も出土している。時期は弥生中～後期のものである。

高坏(26) 出土土器の総量に対して高坏の出土量は少なく、図示できたのは26のみである。復元口縁径29.2cm。内外面ともに丹塗りで口縁部片で端部はやや下方に垂れ気味である。

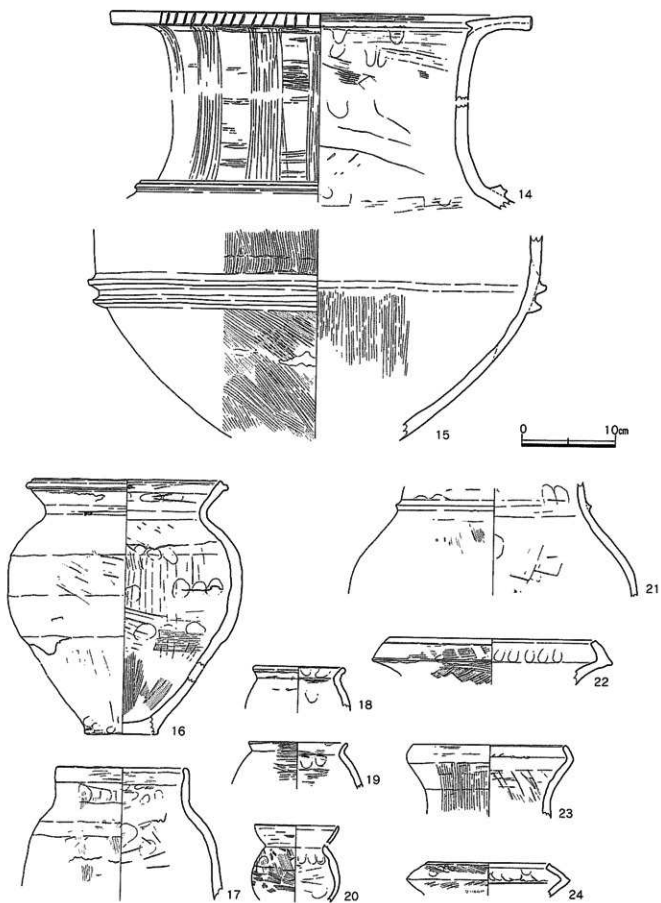
器台(27・28) 器台も出土数は少ない。27はaトレンチ1号溝上層からの出土である。受部径14.2cm受け部が大きくラッパ状に開く。28はbトレンチ上層からの出土である。器高10.6cm、受部径10.6cmで器高が低く、がっしりとしている



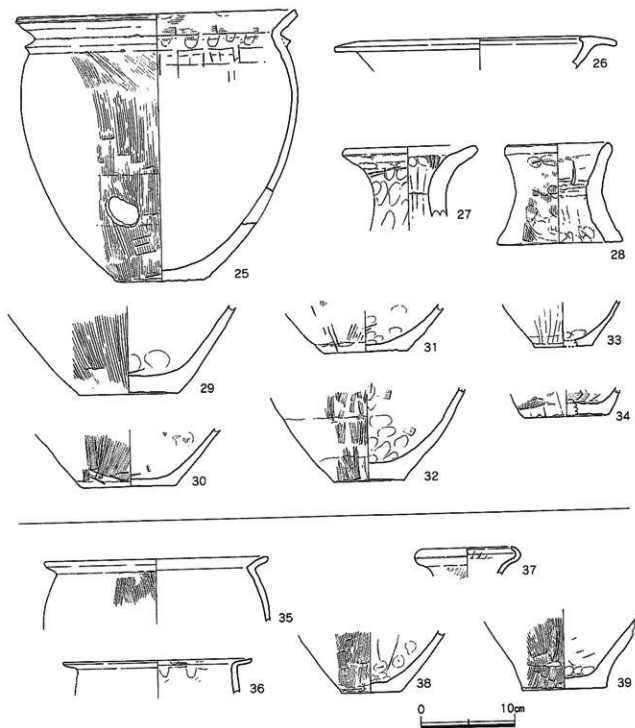
第8図 455番地1区土器出土状況実測図 (1/30)



第9图 1号满出土土器实测图① (1/4)



第10图 1号清出土土器实测图②(1/4)



第11図 1号溝出土土器実測図③ (1/4)

2号溝 (図版3、第6図)

調査区の中央南から北に向かって延びる幅1.24~1.7m、深さ15cmの底面が平坦な溝状の遺構を検出した。溝は3号溝に切れ、1号溝を切る。埋土中からは弥生土器片が出土するものの小片ばかりで時期を確定するにはいたらなかったが、1号溝を測る時期であることは確実である。

甕棺墓 (図版8、第12図)

調査の終盤になって、溝の北端を確認するため、調査区を1mほど北に拡張したところ、溝を切る不整形の土坑を検出した。トレンチによって遺構の確認を試みたところ、甕棺墓であることが判明し、調査を行なった。墓墳は溝がほぼ埋没した後掘り込まれており、甕棺墓の埋葬は明らかに溝よりも後出している。

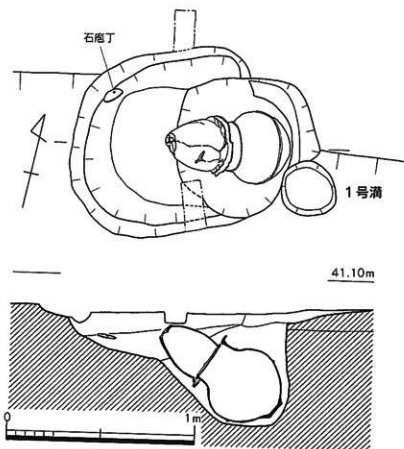
墓墳は2段墓墳で、一段目は長さ96cm前後、幅90cmほどの隅丸長方形で2段目の墓墳に甕棺を傾斜角38°で埋置している。棺は合口式で、上棺に甕、下棺に甕先口縁甕を使用している。

墓墳1段目の北東コーナー部で、底面から10cmほど浮いた状態で石彫丁の未製品が出土した。

土器 (図版26、第13図)

上棺 甕である。器高29.3cm、口縁径25.8cm、胴部最大径25.2cmを計る底部から直線的に立ち上がり、最大径は口縁下7.5cmにあり若干肩が張る。口縁は丸みを有しながらも「く」の字状に外反する。端部はやや丸くおさめる。外面は底部付近をいたナデ、上部を縦ハケ、内面は底部付近をナデ、中位より上では粗い斜めハケにより仕上げている。土器は日常容器を転用しており、外面底部は加熱による赤変、劣化、上位では煤が付着。内面下部で器表の剥落、劣化が観察された。出土時に底部は穴が開いた状態であったが、土圧による破損、陥没によるとみられ穿孔ではない。

下棺 甕先口縁を有する広口甕である。器高46.5cm、口縁径31.2cm胴部最大径39.8cmを測る。



第12図 甕棺墓実測図 (1/20)

胴部は丸みを帯び、内傾気味に直立している。口縁は端部に向かって若干「ハ」の字状に開き気味である。胴上部には板状工具による横方向の強いナデ調整が施される。口縁部および頸部外面にかけて丹が塗られている。

また、頸部外面には縦方向の一条単位への描き暗文がほどこされる。胴下部の突帯下に径1.5cmほどの2個の穿孔がほどこされる。

石庖丁 (図版30、第12図)

凝灰岩質石材を用いた石庖丁の未製品である。全長は10.6cm、幅4.6cm、厚さ0.5cmを測る。平面形は砲弾形を呈する。刃は研ぎだされているが表面の調整は粗く、紐通し穴の一方は穿孔途中で貫通していない。刃部は緩やかに兎を描き、半円形の背部に対し、刃は緩やかに弧を描きながら巡る。紐通し孔の幅は1.4cmである。

②古墳時代の遺構と遺物

祭祀土坑 (図版7、第15図)

1号溝の北西角を切って掘られた土坑である。不整形プランと推定されるが3号溝に南半部を大きく切れ判然としない。深さは40cmほどを計り、断面はすり鉢形を呈する。

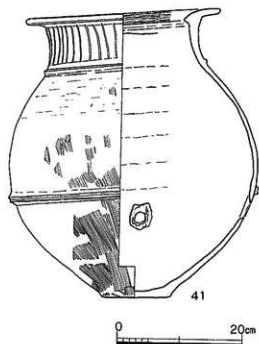
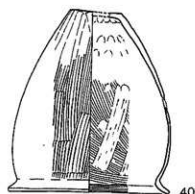
土坑の上層では上下反転して据えられた状態で大型の二重口縁壺、高坏、碟などが一括して出土し、下層からは高坏、複合口縁壺の口頸部、石製紡錘車などが出土している。

上層で出土した二重口縁の大型壺は胴部に斜格子の沈線がめぐる特徴的な土器であるが、調査中に、畑地の各所から破片を採取した。破片が広範囲に散乱していることから、遺跡が後世の開墾等によりかなり削平を受けていることが改めて明らかとなった。

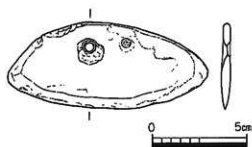
出土遺物 (図版27、第16図)

1～5は上層、6～8は下層の出土遺物である。

1は、大型の山陰系複合口縁壺である。復元口縁径は40cm。胴部最大径は74cm以上を計る。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口唇部は外向きに肥厚する。これまで出土した同種の壺よりも胴



第13図 壺棺実測図 (1/6)



第14図 壺棺外副葬石庖丁実測図 (1/2)

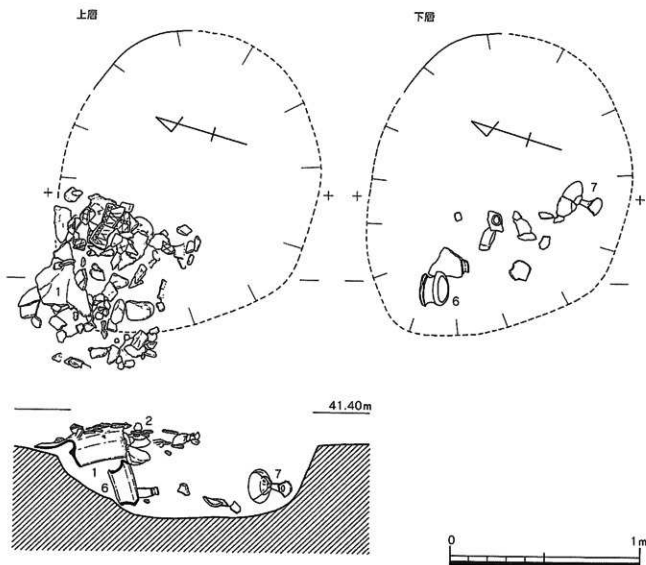
部の開きが著しく、球形化しているように見受けられる。また、胴中央部に上下2段の突帯を貼り付け、口縁部の突帯と合わせ3本ともに格子の刻み目を施すところも珍しい。弥生時代終末から古墳時代の前期に糸島地方で盛行した多重突帯の甕棺の影響を受けたものであろう。また、胴部2条の突帯に挟まれた胴部最大径部を斜格子の沈線をめぐらす。この類例は、近接する井原上学遺跡5号溝から出土した土師器壺がある。

3・4は、甕である。4は、球形の胴部から内湾しながら外に開く口縁へと続く。胴部外面には縦ハケが雑に施され、内面には削りが施される。3は、厚手でつくりが粗く、仕上げはナデのみ。

5は朝鮮半島系の軟質縄文タタキ痕を有す甕片である。胎土は緻密で、色は外面が黒褐色、内面は赤褐色である。

2は高坏で、地に伏せた状態で出土した。杯部底面は平坦で、口縁部は外反する。脚部は屈曲し大きく横に広がる。

6は甕である。球形胴部の壁は薄く削られ外面のハケも丁寧である。口縁は内湾しながら開き口

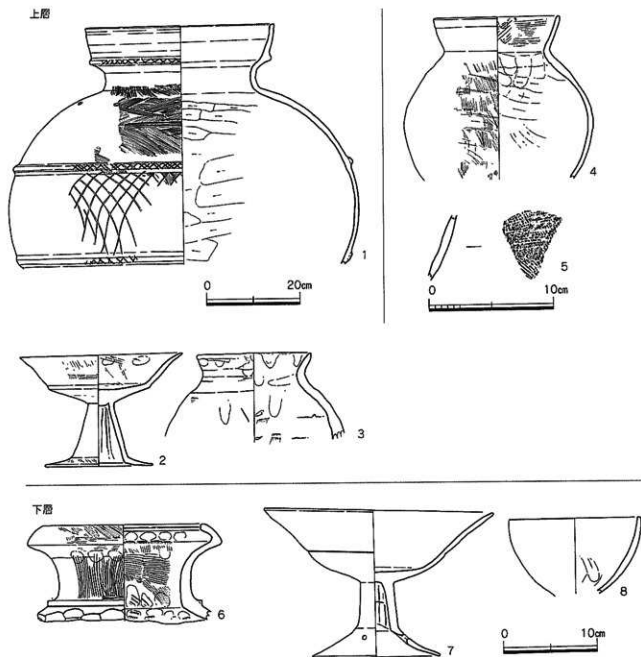


第15図 古墳時代祭祀土坑土器出土状況実測図 (1/20)

唇部は若干内向きに肥厚する。7は高坏である。杯部底面はやや丸みを持ち、口縁部に向かって初めは内湾気味に、中途より大きく外反する。脚柱部は若干膨らみぎみで、裾はなだらかに広がる。脚中部との境三ヶ所に焼成前穿孔が施される。

6は複合口縁壺の口頸部である。胴部上半で丁寧に打ち欠き切断されている。頸部は短く、口縁部は短く外反し、丸みを持って内傾し、収束する。

8は鉢である。復元高口縁径13.9cm。口縁端部は「コ」の字状を呈する。



第16図 古墳時代祭祀土坑出土土器実測図 (1は1/8、5は1/3、他は1/4)

③近世の遺構と遺物

3号溝 (図版3、第5・6・7図)

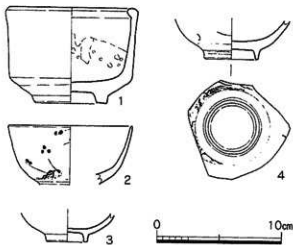
1号溝の北縁に平行して、1号溝の埋土内を東西方向に貫流する近世溝を検出した。溝には新古の切り合いがあり、新溝が古溝よりも若干北側に掘り換えされている。断面は逆三角形ないしは、かまぼこ形を呈し、幅は新溝で1.2~1.45m、深さ16~42cmを測る。埋土内には拳大の礫が多く含まれており、人為的に埋め戻されたものとみられる。屋敷境の溝であったのだろうか。

埋土上層から陶磁器が出土した。17世紀代の資料とみられる。

出土遺物 (図版27、第17図)

1は陶器の香炉である。口縁径10.3cm、器高7.6cm。底部と体部との間には明瞭な稜を有し、体部は直立し、口縁端部は内面に肥厚する。外面および内面上半部には灰釉がかかっている。

2~4は磁器茶碗である。2は復元口縁径9.7cm、3は高台径3.3cm、4は高台径4.4cmを測る。



第17図 3号溝出土遺物実測図 (1/3)

(3) 2・3区

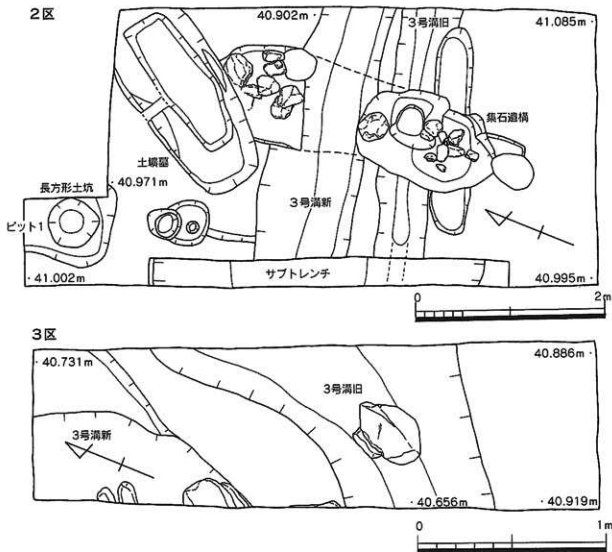
①調査の概要

1区で検出した1号溝の延長方向を確認するため、その東側に2本のトレンチを設定した。西から順に2、3区とした。

耕作土と遺物包含層には弥生土器、土師器片が多く混入しており、周辺で、祭祀行為等が行われたことをうかがわせた。いずれの調査区も暗褐色粘質土を地山とするが、自然地形が西から東に傾斜しているため、1区西端での遺構面の標高が41.15mであるのに対し2区では標高41.0m、3区では40.9mとなり、遺構面の見かけの深さは1区から徐々に深さを増した。

2区では、1号溝を確認することができたが、3区では確認できず、このため、2区を拡張し溝の延長方向をできる限り確認するように努めた。しかし、廃土の置き場に窮し、やむなく3区を埋め戻して廃土置き場とし、調査を行なうこととなった。

2区では1号溝の他、弥生時代の土師墓、集石遺構、3号溝、近世土坑、柱穴等が出土した。3区では3号溝の続きが確認できたのみである。



第18図 2・3区遺構配置図 (2区は1/40、3区は1/20、薄アミ部分は1号溝)

②弥生時代の遺構と遺物

1号溝

1号溝は、1区でも東に行くにつれて浅くなっていたが、2区の西壁では溝の立ち上がりか辛うじて確認できたにとどまり、東壁では土層として溝の埋土は確認できず、わずかに遺構面に溝の痕跡が暗褐色の染みとなって観察できたにとどまる。

3区では1号溝の痕跡は全く確認することができなかった。

土墳墓 (図版9a、第19図)

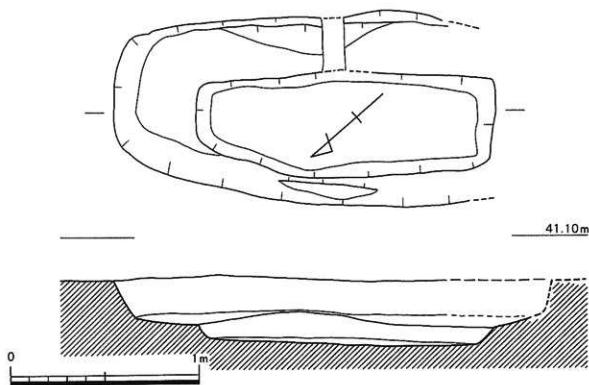
2区の北東部で検出した。墓壇は1号溝の掘り方を切っており、1号溝の埋没後に掘られたものと推定される。墓壇の北端はさらに調査区外にあったが直近に納屋が迫ったため、完備は断念した。

墓壇掘り方は2段で、1段目は主軸長190cm以上、幅は98cmを測る。2段目は墓壇の北東に寄る。2段目の掘り方は主軸長150cm、幅54cmを測る。墓壇の深さは2段目の底面まで32cmを測る。

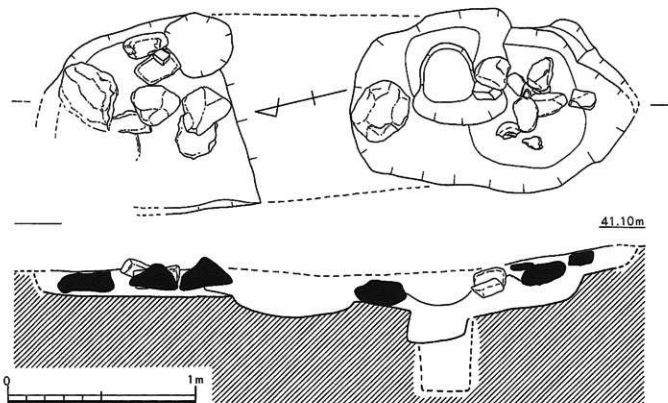
主体部は木棺であったと推定される。

集石遺構 (図版9b、第19図)

3号溝に分断されており、2基の集石遺構のようにみえるが、本来は1基の細長い土壇であったものと推定される。掘り方の北端は土壇墓に切られる。主軸長3.2m以上、幅は105cm前後と推定される。埋土中に人頭大の花崗岩が多く含まれる。1号溝との切り合いは明らかではない。



第19図 土壇墓実測図 (1/20)



第20図 集石遺構実測図 (1/20)

③その他の遺構

長方形土坑 (第18図)

2区の北端部で方形ないしは長方形プランとみられる浅い土坑を検出し、掘り方底面から径30cmの柱穴(ピット1)が出土した。底面に納められたような状態で文字が陽刻された石製品が出土した。

出土遺物 (図版30、第45図5)

2トレンチのピット1から出土した扁平な結晶片岩の川原石を加工した石製品である。全長7.3cm、幅5.1cm、厚さ1.1cmでちょうど手のひらに取まるサイズである。

石の表面はすり磨いて平端にし、一方の面に「天満」、その裏面に「馬」と陽刻されている。表裏では文字が天地逆になっており、石の加工面には赤色顔料を塗布し、さらに文字にのみ、黒色顔料を塗り重ねている。彩色、文字の意味などから、護符のようなものあるいは雨乞いの願かけに用いられ、埋納されたのかもしれない。

伴出遺物がないため時期は明らかでないが、ピットの埋土が灰褐色の砂質土であったことから、中近世遺構の埋土と推定され、3号溝が近世であることから、これに近い時期の資料と推定される。

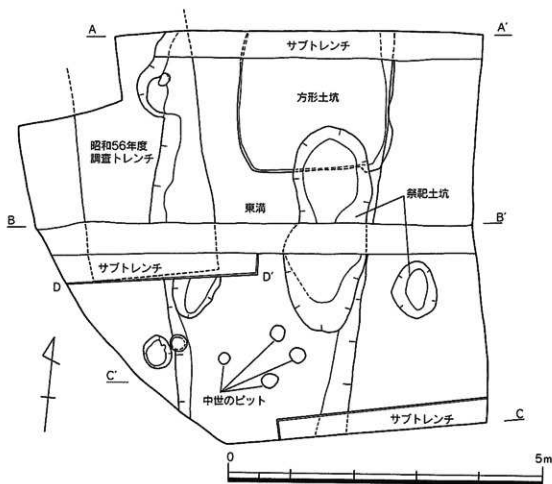
4. 435番地

(1) 調査地点の概要

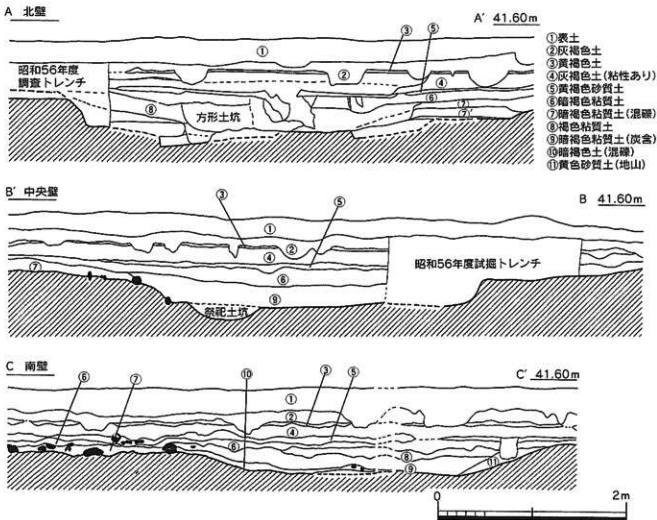
435番地の調査は、455番地で墳丘墓の北側を巡る溝が検出されたため、東側での溝の有無を確認し、墳丘の東端と墳丘の平面形の確定を主な目的として10月から実施した。

調査地点は昭和56年度に一度調査が行なわれ、南北6m、幅2mのトレンチの東側で東に向かって傾斜する落ち込み面が確認されている。しかし、当時は調査面積が狭くそれが自然の落ち込みなのか、遺構であるかの確定はできなかった。そこで、今回は面積を拡張して調査を行ったところ、表土下約50cmから幅3.3~3.6m、深さ20~30cmの断面逆台形を呈する溝を発見した。溝の方向は墳丘西側の溝の方向にほぼ平行している。

この他に、溝が埋没した後に掘り込まれた土坑から、朝鮮半島系の烏足状タタキを有する韓式軟質土器が出土している。同様の土器は、三雲・井原遺跡内から3個体以上出土しているが、器形の分かる個体として井原塚廻遺跡、井原上学遺跡について3個体目である。



第21図 435番地遺構配置図 (1/60)



第22図 東溝内土層断面図 (1/40) (アミかけ部分が溝の埋土)

(2) 弥生時代の遺構と遺物

東溝

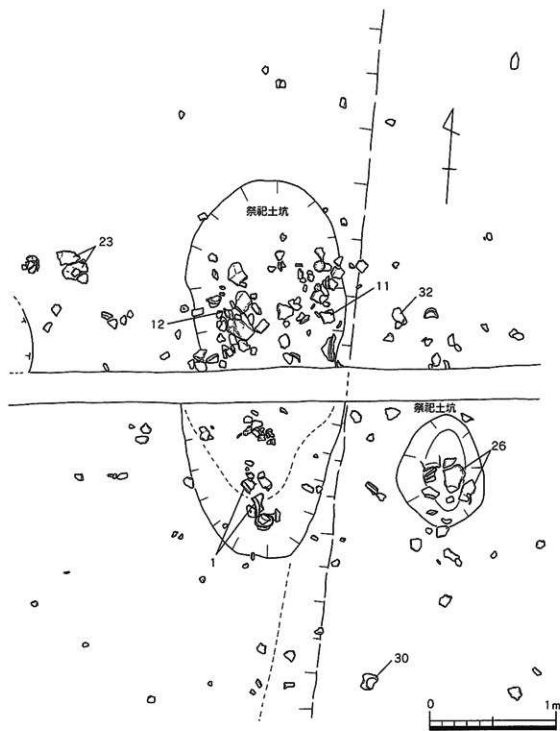
東溝は西溝と平行して墳丘墓を囲むように南西から北東方向に伸びており、総延長9m、幅は調査区中央部分が狭く3.3m、北側が3.6m、深さは南側が浅く約20cm、北側で約30cmである。断面形態は逆台形を呈しており底面部分は平坦である。溝は10～15cm弱の礫や弥生時代中期中葉の土器を含む暗褐色土(第22図⑦)を切込んで造成されている。

北壁では方形土坑による攪乱を受けているが、溝埋土は西側部分に一部観察できる褐色粘質土層(⑧層)がこれにあたる。北壁の墳丘側は以前の調査で落ち込みが確認されているが、埋土層の傾斜から、本来の溝の落ち部分はこれより若干上にあつたと考えられる(第22図)。中央壁では暗褐色粘質土(⑨層)が溝の埋土にあたり、溝造成前に作られた祭祀土坑と思われる遺構が、溝遺構の下層に観察できる。

南壁では、溝埋土は褐色粘質土と炭を含む暗褐色粘質土、砂礫混暗褐色土の3層に分けられる(⑧、⑨、⑩層)。溝断面形は、逆台形を呈するが、東側の上りは緩やかで墳丘側ほど明瞭でない。東溝出土土器の殆どは溝の切り込んでいる⑦層から出土しており、溝造成以前に存在した祭祀土坑等の遺物と考えられる。攪乱を受けているため完形のもの無く、同一個体の破片も散在している状況で出土している。おそらく、溝造成時の攪乱による状況を示しているのだろう。溝埋土からの

出土遺物は無く、確実な溝の時期を把握することができなかった。

東溝の特徴としては、北側の1号溝や西溝に比べて極端に遺物（祭祀土器）が少ないことが挙げられる。1号溝や西溝では弥生時代後期前半の祭祀土器や石器が重なるようにして検出しているが、墳丘の東側にあたる1265番地と、当調査地点の溝から遺物は殆どみられない。墳丘周辺の



第23図 東溝内土器出土状況実測図 (1/30)

自然地形は東側に向かって低く傾斜していることから、祭祀は主に標高の高い北、西側で行われた可能性が高い。墳丘北、西側で検出された溝は、標高が高いため後世による削平が大きく、溝本来の断面形態が明瞭でなかったが、東溝の底面が平坦であること、幅が3.5m～4.0m前後であること等墳丘墓を巡る一連の溝は、共通した概念のもと造成されたことが伺われる。また、本来の溝の深さも東溝の残存状況から少なくとも30cm以上あったことが確認できた。今回の調査によって、墳丘墓の東側が特定でき、墳丘の溝内縁東西幅が32mと確定できたことは大きな成果といえる。

祭祀土坑 (第23図)

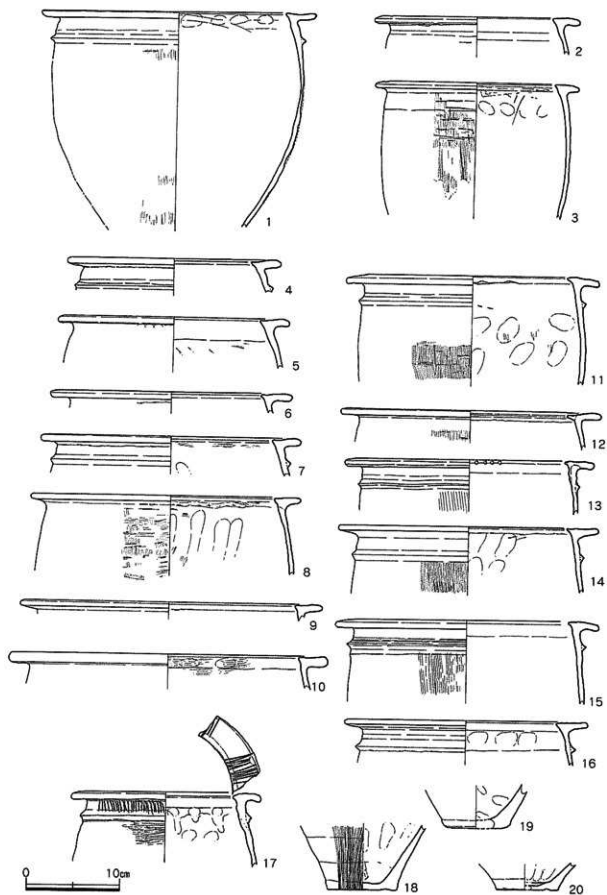
今回の調査では、溝が掘削される以前の遺構として調査区中央と南東部に祭祀土坑が検出されている。中央の祭祀土坑は南北方向に長い楕円形を呈し、南北3.2m、東西約1.2m、残存の深さ16cmで、南東の祭祀土坑は、南北90cm、東西70cm、残存の深さ7cmである。この2箇所の祭祀土坑とその周辺から、弥生時代中期中葉の祭祀土器がまとまって検出した。土器の器種は甕、広口壺、器台、鉢で、線刻や刻み目、暗文等の祭祀性の強い装飾を施した甕が出土しているが、高坏は出土していない。前述のように、溝を造成した際の掘削のため完形のもの無く、散在した状況で出土している。丹塗りの個体が多いのも特徴といえる。

出土土器 (図版28図、第25・26図)

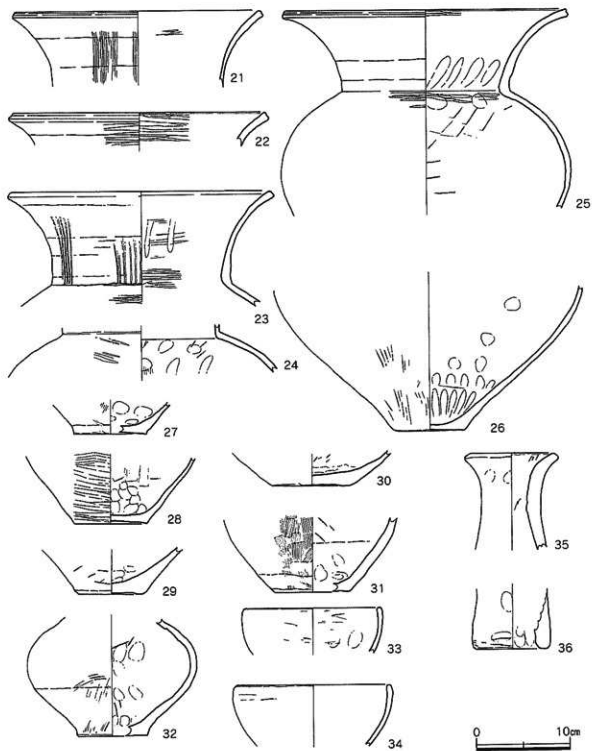
甕形土器 中央祭祀土坑から出土した土器は1・3・5・6・8・11・12・14～17・19・21～24・27・28・33・34・36で、南東の祭祀土坑から26・31の甕底部2点検出している。時期は弥生時代中期中葉である。

1は口径29.5cm、胴上半が張る。口縁端部に細かい刻み目が残る。2は口径18.9cm。3は口径がやや未発達で、口径17.7cm。4は口径22cmで胴の張りが大きく、口縁もややたちあがる。5・6・7は外側に発達する口縁を持ちそれぞれ口径が23.3cm、23.7cm、26.1cmである。8はやや未発達の口縁で頸部内面を工具で強くナデている。口径27.9cm。9・10ともに口縁部のみで残りが悪い。口径は32cmと34.2cm。17は丹塗りの甕口縁で、頸部に上から下に向けての線刻と、口縁上面に暗文を持つ。外面と内面頸部にかけて丹が塗られており、外面の調整は横方向のミガキである。口径16.6cm。11・12は口径22.3cmと、26.5cm。13は口縁内側に刻み目をもつ珍しいタイプで、4つが一単位で施されている。同じような口縁内面に刻み目を持つ個体は、三雲八反田遺跡の住居と三雲番上遺跡の土器溜りからも出土している。14・15・16は甕の口縁部で、14は口径27.5cmで外面ハケ目、内面指押え痕が明瞭に観察できる。16の口径は23.3cmで15の口径は25.3cmで、突帯貼付痕が明瞭に残る。19は底部径6.8cmで底部がやや丸みを帯びる。18・20は甕の底部で、それぞれ底部径が7.5cmと6.7cmである。

21～23は広口壺の口縁部で、21と23には口縁から頸部にかけてそれぞれ6～8単位の暗文が施されている。口径は21が26.3cm、22が26.8cm、23が27.3cmでそれぞれ内外面ともに横方向のミガキを行っている。24は広口壺の頸部で外面横ミガキ、内面は指押え痕が明瞭に残る。25は祭祀土坑出土の中で一番残りが良い個体である。口径30cm、頸部径18.1cmで、外面は風化が激しいが横方向のミガキ痕が頸部に僅かに観察できる。内面は指押えである。26は広口壺の下半部で底部径7.1cmと小さく、若干上げ底である。外面調整は外側縦方向のミガキ、内面指押えで



第24図 東構内出土土器実測図① (1/4)



第25図 東溝内出土土器実測図② (1/4)

ある。27~31は壺の底部で、27は底部径7.7cmの上げ底で内面風化、内面指押さえ。28は底部径7.7~8.1cmで上げ底。外面は横方向のミガキが明瞭に残り、内面も指押さえ痕が明瞭に残る。29は底部径6.7cmで、やや上げ底。外面は接合痕等が明瞭に残る雑な調整で、内面は指押さえ痕が残る。30は底部径8.2cmで上げ底。底部から胴部方向に低く立ち上がる。内面に指押さえ痕が残る。

る。31は甕の底部の可能性ある。底部径7.9cmで、胴部にむけてあまり広がらずに立ち上がる。外面縦方向のハケ目、内面指押さえ。32は小型甕の頸部上が欠損している。底部径は7.2cm、平底で焼成が良くしっかりとした作りである。外面は刷毛目のち丁寧なナデを施しているものの一部にハケ目痕が残る。内面は接合部分に指押さえと工具痕が明瞭に観察できる。33と34は鉢でそれぞれ口径が14.2cmと16cm。35は甕台口径8.8cm。36は甕台の底部で底部径7.7cm。

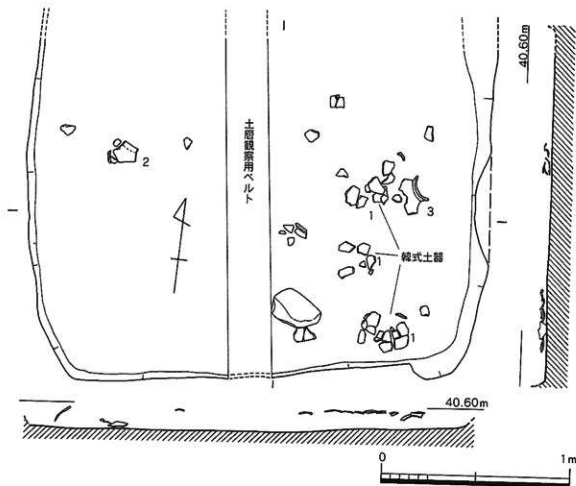
(3) 古墳時代の遺構と遺物

方形土坑 (図版12a図、第26図)

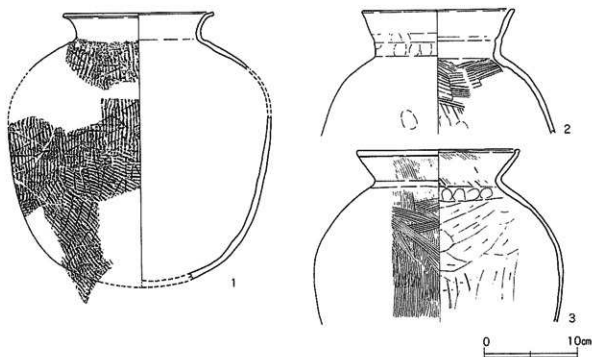
調査区の北側中央部で東溝を切る方形の土坑が検出された。土坑の大きさは現存で南北1.8m、東西2.4mのやや隅丸の長方形で、北側は調査区外のため不明である。遺構は殆ど深さが無く8cm～3cm程の、断面皿状である。大きさと形状から当初は住居かと考えたが、柱穴やその他住居に伴う遺構が全く検出されなかったため、ここでは土坑として扱う。

土坑は、東溝の切り込んでいる第⑦層から切り込まれているが、断面で確認できたものの、平面では検出しにくく上部を削平してしまった部分もある。東溝が完全に埋没した後には作られている。

出土遺物は、鳥足状タタキを持つ朝鮮半島系の韓式軟質土器1、土師器甕2である。韓式土器は



第26図 435番地方形土坑実測図 (1/20)



第27図 435番地方形土坑出土土器実測図(1/4)

土坑の東側に3箇所に分散した状態で出土し、出土レベルも土坑床面より10cmほど上面の埋土中より検出された。残存状況は悪く、1口縁部は全体の1/6ほどで、胴部も1/4ほど残っているのみである。3は、残りが良く、1口縁から肩部分まで1/2ほど残存している。

出土遺物

1は、鳥足状タタキを持つ朝鮮半島系の軟質韓式土器である。復元口径15.9cm、復元高29.3cm前後。口縁部は頸部から大きく外反し、肩部が大きく張る形態である。口縁部から肩部分と、胴下半部の破片がまとめて出土した。

調整は、外面上半部は鳥足状タタキを使用しているが、下半部は格子目状のタタキを使用しており、上半と下半でタタキの種類と方向を変えている。内面の調整は横方向のナデで指押さえ痕も明瞭に残る。胎土には多量の金雲母が入る。

三雲・井原遺跡内では今までに井原塚廻遺跡、三雲上覚遺跡からが出土しているが、個体数はまだ3個体強と少なく貴重な資料である。外面の調整方法は井原塚廻遺跡で出土したものとほぼ同様のもと思われるが、器形は今回出土した個体の方が胴部の張りが強く、口縁部も強く外反している点などの違いがみられる。

2は、僅かに二重口縁の痕跡を残す甑で、口径16cm、肩部がやや張る形態である。外面調整は斜め方向の刷毛目と指押さえで、内面は横、斜め方向の粗い刷毛目や、工具痕、指押さえ痕等が明瞭に残る。3の口縁は、内湾しながら開き、内側に肥厚する口唇部をもつ。胴部内面は薄く削られ、外面のハケ目調整も丁寧である。口縁部が1/2ほど残存し、残りのよい個体である。

5. 436番地

436番地は窪義孝氏所有の水田である。435番地における東溝の確認を受け、南側の延長方向を確認するために調査を実施した。平成6年度に同地で一度発掘調査が実施されている（Ⅲ区）が、溝は出土していない。しかし、現市道に近い水田の北端部が一部未調査であったことから、前回調査成果を補強するため当時のトレンチからさらに北側の市道際までトレンチを伸ばして確認調査を行った。

ほ場整備時の盛土であるマサ土層下に遺物包含層を抑んで標高41.3mで礫層の地山を検出した。この礫層は前回調査で検出した礫層に続くもので、遺構は全く確認できなかった。東溝、西溝群の遺構面のレベルはそれぞれ41.6m、41.6~8mであるため、溝が掘削されていれば当然、遺構が確認されてよい高さである。また、前回調査ではトレンチ南部でから古墳時代の堅穴住居が出土し、良好な遺存状態であったことから一帯が後世に大きく削平を受けた可能性は低く、このことから溝は436番地までは達していなかった可能性が極めて高い。

したがって溝が435番地から続いているとすれば道路下で西に向けて屈曲していることになる。

地山直上で鋼絲部に加工が施された石製品が1点（第45図4）出土した。

6. 1265番地

1265番地は里道である。455番地の北溝（1号溝）、435番地における東溝の確認を受け、両溝の交差状況を確認するために調査を実施した。調査地は幅が狭いため、東溝の推定延長方向に合わせ幅1m、長さ8.8mのトレンチを設定した。

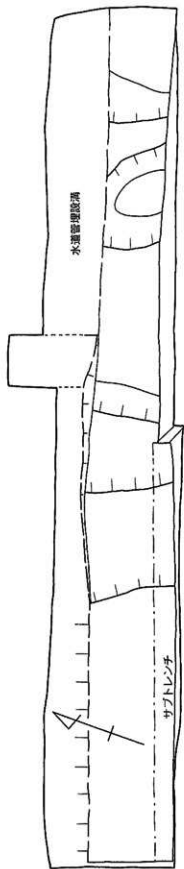
トレンチ西端では標高40.64mで地山となる黄褐色粘質土層を検出し、東に2.6mほど平坦面が続いた後、2mほどなだらかな下り勾配へと変わり、そこから落差30cmの明瞭な段があり平坦な底面となる。この段落ち斜面裾の9層には炭化木、炭、焼土が混じり土層から流れ込んだ状況が認められ、底面では地山に張り付くように炭化木が出土した。また、最下層（10層）から少量ながら弥生土器片も出土している。さらに底面を追ってさらに東へ4mほど掘り進めたところ、2.6mの地点で小溝状の落ち込みを介してわずかではあるが、立ち上がりも確認された。

落ち込みの土層の堆積状況や地山の傾斜変化の様相は、平成6年に北側の427-1番地で行なわれた調査結果と似ており、なかでも、落ち込みの埋没過程で検出した浅いU字形の溝状の掘りこみ（7層）は平成6年度調査の10層に対応するものとみられ、埋土中から古式土師器片が出土しており、この層が古墳時代に掘削された溝の埋土と推定される。

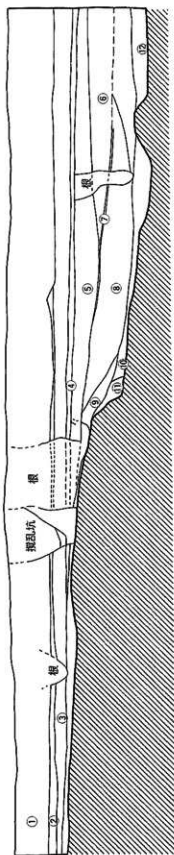
したがって、この段落ちは自然地形とは考えにくく、人為的な地山整形によると考えられ、落ち込みは古墳時代の溝以前に掘削されたものである。

落ち込みと435番地の東溝との関係について、東溝の延長方向に対しては若干西に振れるものの、辛うじてその延長線上に乗っている状況である。また、溝の底部幅と落ち込みの底部の幅もほぼ一致しており、また、埋土中に土器等遺物を殆ど含まない状況もよく似ている。

これらの状況からこの段落ちは東溝と同一の溝の一部と推定される。



41.50m



- ⑦ 灰色粘質土
- ⑧ 褐色土 (古式土調製を含む)
- ⑨ 混質褐色土・ブロック状褐色土
- ⑩ 腐区褐色土 (灰化物を含む)
- ⑪ 腐区褐色土 (灰化物、煤土を含む)
- ⑫ 褐色粘質土 (浮生中期土層を含む)

- ① 褐色粘質土
- ② 腐質粘質土
- ③ 灰色粘質土
- ④ 腐質粘質土
- ⑤ 腐区褐色土
- ⑥ 褐色粘質土

第28図 1265番地遺構平面図及び断面図 (1/40)

7. 1264番地（市道）

(1) 調査地点の概要

三雲南小路遺跡の西100mの市道が平成12年3月に道路整備工事が行われることとなり、道路幅の拡幅と排水溝の設置が予定された。当該地南部では1974年に一部トレンチ調査が行なわれ、竪穴住居、柱穴などが確認されており、試験の結果でも竪穴住居、溝などが確認されたため、工事に先立って発掘調査を行なった。調査範囲は南部では幅3m、北部では幅2m、全長65mの細長いものとなった。調査区南部の一部は1974年調査の南小路I-8に重複する。

表土除去すると中近世の遺物包含層を挿んで上層に中世遺構面、下層に弥生～古墳時代遺構面の2層を確認した。

調査によって弥生時代の住居1棟、古墳時代の竪穴住居10棟、弥生時代後期の土坑1基、中世溝1条、柱穴などを確認した。遺構面は南半部は平坦に近く、竪穴住居はまばらに分布する程度であるが、北部では下り勾配の緩斜面となり、数棟ずつ切り合いながら分布しており、かなりの密度で住居が分布するものと推定される。調査区の幅が狭いので、いずれも遺構の一部に留まり、構造、時期等詳細については不明なものが多い。

(2) 遺構の概要

竪穴住居

1号住居（図版17a、第30図）

調査区の南端にかかる住居で、周壁が10cmほど遺存している。北周壁に接してカマド遺構を確認したが周壁下の周溝は確認できなかった。床面は住居の中ほどから南にかけて一段低くなる。

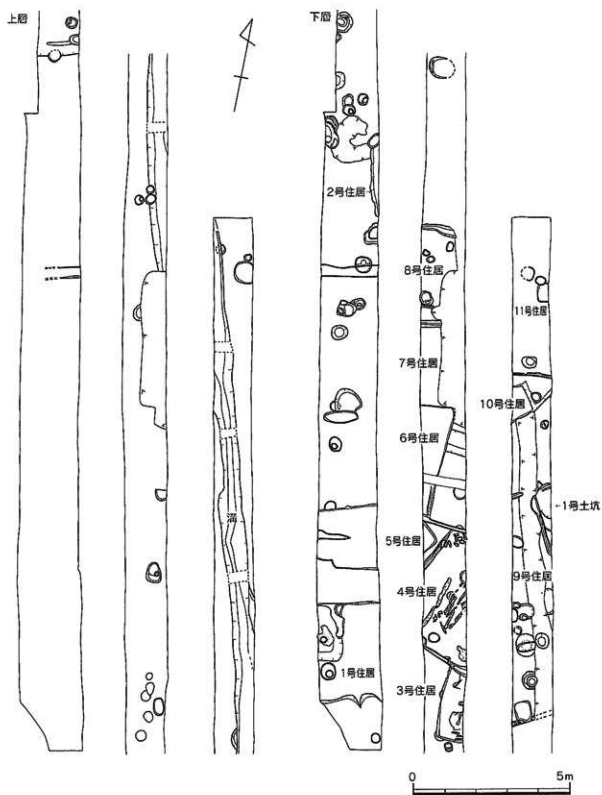
カマドは黄褐色土を築き固めた造り付け式カマドで、東半壁体のみを検出した。壁体は周壁からの長さ102cmを測る。壁体内面は焼けて赤変していた。煙道は確認していない。掻き出し部は床面よりも5cmほど方形に掘り窪められていた。

カマドの燃焼部から掻き出し部にかけて土師器塊7点、甕2点がまとまって出土した。塊は完形のまま床に埋置された状態のものが多く、5、6は故意に土器の上に石を被せた状態で出土している。また、塊4・7・8・9では口縁の一部を打ち欠いており、カマドあるいは住居を廃棄した際に行われた祭祀行為で使用されたものとみられる。

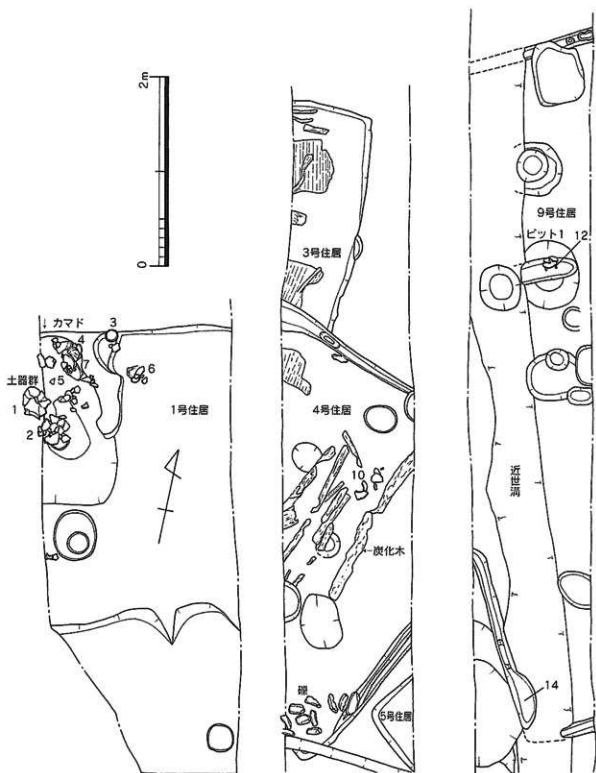
出土土器（図版29、第32図）

1、2は甕である。1は、胴長で復元口径18.5cm。外面は粗いハケ調整、内面は縦方向のヘラケズリで仕上げる。色は淡黄褐色を呈する。2は球形を呈し、口縁部は打ち欠かれて欠失している。胴部最大径22.6cmを測る。外面は粗いハケ、内面は横方向のヘラケズリで仕上げる。色は淡褐色を呈する。

3～9は塊である。器表は赤褐色ないしは黄褐色を呈し黒斑を有するものが多い。口縁部が内湾するタイプ（3・5・6・8）と、外反するタイプ（4・7・9）の2種がある。3から順に口縁径は12.4cm、14.3cm、13.0cm、13.8cm、13.3cm、14.5cm、13.5cm、器高は5.1cm、5.9m、6.3m、6.5cm、5.6cm、6.5cmを測る。焼成はいずれも良好である。



第29図 1264番地 (市道) 遺構平面図 (上層、下層) (1/120)



第30図 1・3・4・5・9号住居実測図 (1/40)

2号住居（第29図） 調査区南端から16mの地点で東壁にかかった（長）方形プランの掘り方の一部を検出した。南北長は2.2mを測る。竪穴住居の一部と推定されるが詳細は不明である。

3号住居（図版17 a、第30図） 調査区南端から22mの地点で検出した（長）方形プランの住居の一部で南西コーナーを確認したが、北は4号住居に切られる。床面では焼丸木、竈状の繊維が出土した。

4号住居（図版18 a・b、第30図） 3号住居の北を切って掘られた（長）方形プランの住居で北コーナーを確認した。南北長は3.8mほどと推定される。周壁下には周溝がめぐる。床面中央から焼けた丸木がまとまって出土し、その間から土師器二重口縁甕が1点出土した、また北コーナー付近で床面から浮いた状態で拳大の礫が出土している。

出土土器（図版29-10、第32図）

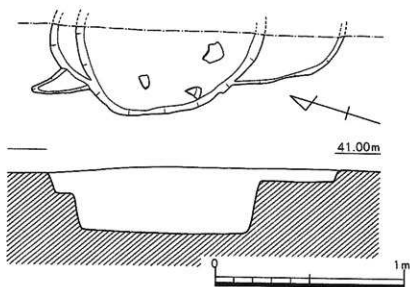
10は二重口縁甕である。復元口縁径は15.5cmを測る。胴肩部は大きく肩が張り、短い頸部から緩やかな口縁屈部を経て、内湾気味に立ち上がる口縁部にいたる。外面は縦ハケの後ナデ、胴部内面はヘラケズリ、口頸部はヨコナデで仕上げる。焼成は良好で胴部に黒斑がある。

5号住居（第30図） 4号住居の南で住居のコーナーと推定される掘り方を確認した。竪穴住居の一部と推定されるが、詳細は不明である。

6号住居（第29図） 5号住居の北で確認した（長）方形プランの住居で、東壁の長さは3.4mを測る。周壁から南東に延びる排水溝は4号住居を切る。道橋の大半は調査区から西にあり詳細は不明である。

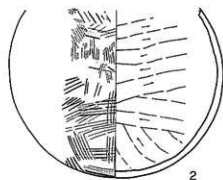
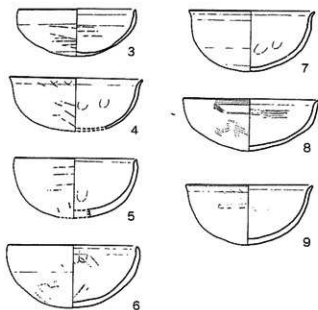
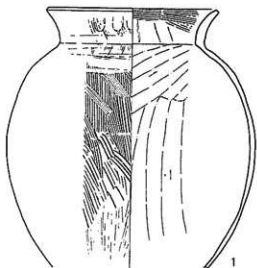
7号住居（第29図） 6号住居と7号住居に挟まれた住居で、プラン等詳細は不明である。

8号住居（第29図） 7号住居を切って掘り込まれた竪穴住居で、東部は掘削で破壊されている。南北の周壁下では周溝が掘られていた。

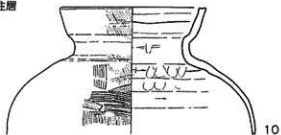


第31図 1号土坑実測図（1/20）

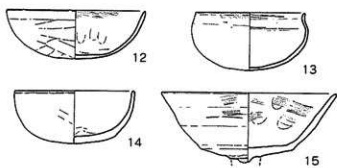
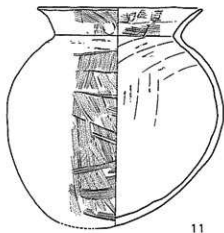
1号住居



4号住居



9号住居



1号土坑



第32図 1264番地(市道)出土土器実測図(1/4)

9号住居 (図版19・20、第30図)

北端から8.4m地点で検出した南北長6.8mの大型竪穴住居で周壁下には周溝がめぐる。ピット1はこの住居の主柱穴と推定され、柱の抜き取り坑から土師器塊が2個重なった状態で出土した(図版20a)。

抜き取りに際して行われた祭祀時に使用、廃棄されたものであろうか。また、北側の調査区の壁際から土師器がまとまって出土した。また、北周溝からも土師器塊が1個出土している。

出土土器 (図版29-11~15、第32図)

11は甕である。復元口径17.7cm、器高23.3cmを測る。胴部がややいびつにゆがんでいる。口縁部は外反し、端部は細く尖り気味に納める。外面は縦ハケの後、肩部にのみ軽く横ハケで仕上げられる、内面胴部下から中位まで縦方向のヘラケズリ、上部は斜めのケズリが施される。口縁部は横ハケで仕上げる。

12~14は壺である。12、13は口縁部が内湾するが、13は一旦内湾するものの口唇部は如意状に外反する。口縁径は12から順に14.8cm、11.5cm、12.7cm。器高は5.2cm、6.2cm、5.7cmである。焼成はいずれも良好である。15は高杯の杯部である。口縁径18.6cm、平坦な底部に若干内湾気味に開く口縁部がつく。焼成は良好である。

10号住居 (図版19、第29図)

調査区の北端近くで検出した竪穴住居で、大半を11号住居に切られわずかに南周壁付近が確認できたに留まる。壁際から削り出しのベッド状遺構の一部を確認した。埋土から弥生後期の土器が出土している。

11号住居 (図版19、第29図)

10号住居を切って掘り込まれた竪穴住居で北端は調査区外にある。遺構の時期は不明であるが、弥生後期の住居を切っていることから古墳時代の住居である可能性が高い。

土坑

1号土坑 (図版18c、第31図)

9号住居の北コーナーで同住居に切られている。楕円形プランの上坑とみられるが、大半は調査区外にある。現況で南北長1.56m、深さ33cmを測る。埋土から弥生後期の高杯の杯部が出土した。

出土遺物 (第32図)

3片に割れていたが接合し。復元口径27.2cmを測る。杯部は深く、口縁部は「く」の字状に外反する。色調は暗黄褐色、内外面とも丹塗りであり外面にはハケ目が残る。焼成は良好である。

溝

調査区の中央から北にかけて調査区を斜めに縦断し、直進する断面漏斗形の溝である。埋土は灰褐色砂質土で、埋土からは弥生土器、土師器等が出土している。時期を決定する決め手に欠けるが、中世~近世の遺構と推定される。流水による顕著な浸食は認められないことから、農業用水路ではなく、集落内の排水、屋敷の境界溝の類と考えられる。

8. 469番地

(1) 調査の概要

当該地点は三雲南小路遺跡の北西約100mに位置する。この調査は地権者から倉庫建案の届出が提出されたため緊急に調査を実施した。

試掘の結果、調査地点は地表から約1mの深さで検出された。そこで、工事計画に合わせ東西2区に分け発掘調査を実施した。Ⅰ区は1m×14mの試掘溝を設定し、遺構の確認を行った。調査面積14㎡を測る。Ⅱ区は11m×15mの長方形で調査面積165㎡を測る。

Ⅰ区からは2軒の住居跡、上坑、柱穴が検出された。Ⅱ区からは石組遺構1基、焼土層、円形の焼上坑4基、柱穴群多数を検出した。

調査は平成10年3月9日から平成10年3月31日まで実施した。

(2) 遺構の概要

①Ⅰ区

住居跡（第32図）

Ⅰ区の南端部と調査区の中央部やや北側よりに住居跡の一部を検出した。南端部の1号住居は弥生時代後期のものと考えられ、調査区の中央部やや北寄りの2号住居は古墳時代中期のものと考えられる。遺物は土器片が少量出土したが細片で図示し得なかった。

その他の遺構

Ⅰ区から住居跡の他に土坑・柱穴等を検出したが、調査区の制約のためその詳細については不明である。

包含層から滑石製の勾玉が1点出土している。

②Ⅱ区

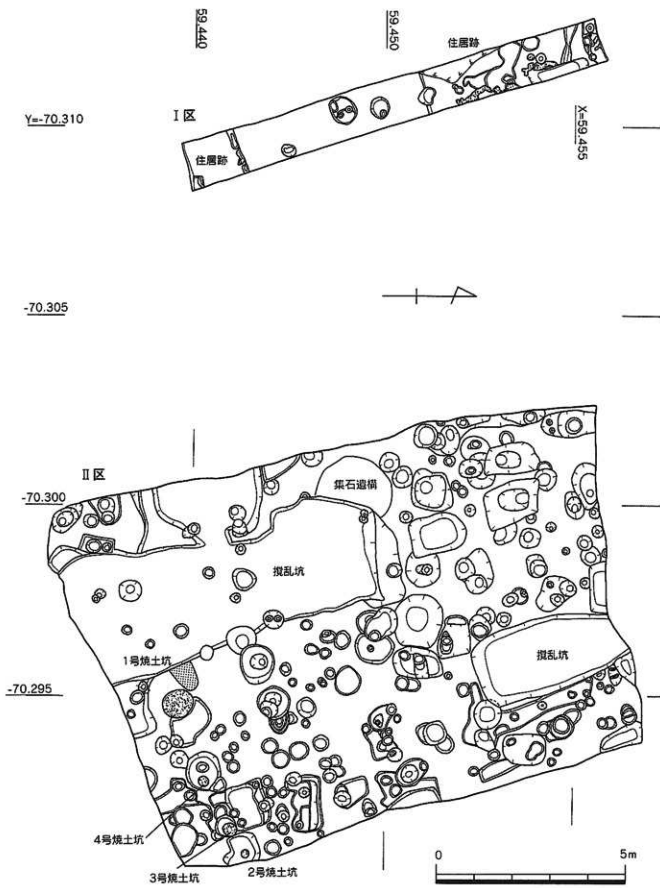
築石遺構（図版22a、第32・33図）

Ⅱ区の中央部西端部に位置する。遺構は一部後世の削平を受けており、原形をとどめてないが、復元すると不正楕円形を呈していたと想定される。遺構上部には30cm前後の石を敷き詰めており、その石の表面は火を受けて赤色に変色し、遺構下部も火を受け一部焼土化していた。

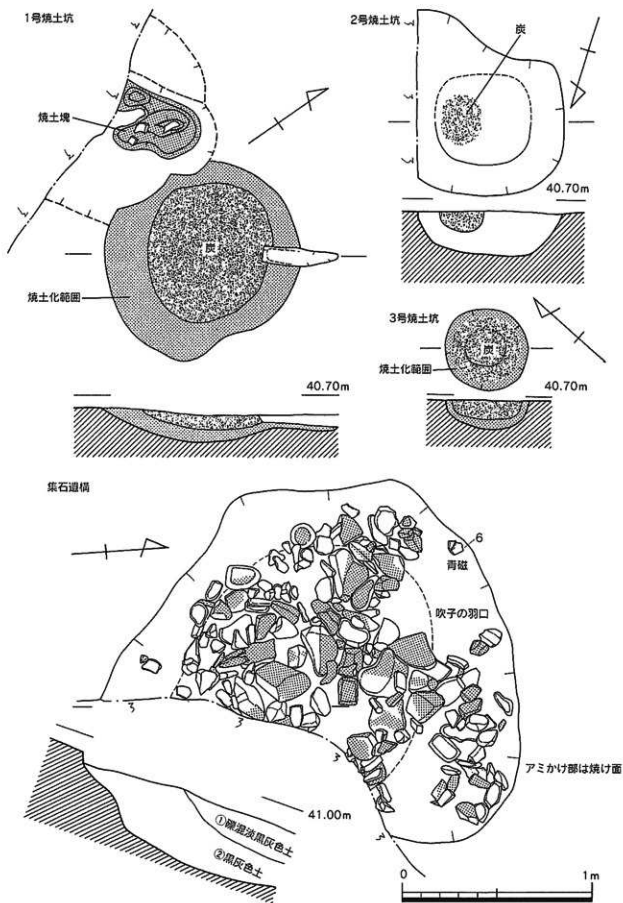
石組の直上から鉄滓と羽口が出土することから、製鉄に関連する遺構と考えられる。埋土からは陶磁器が出土しており、遺構の時期は室町期と推定した。

焼土坑（図版21b～e、第32・33図）

Ⅱ区の南東隅部に位置する。東西方向に並んだ状態で計4基確認している。4基の円形の焼土坑はすべて中心部に炭化物が堆積し、その周辺部には焼土層がある。なかでも、1号焼土坑が最も残存状況が良く、輪の羽口の跡と想定できる部位を確認できる。さらに、1号焼土坑の西側には焼土塊も確認したことから、何らかの廃棄土坑であると推定される。なお、1号焼土坑内の炭層からガラス管玉が、2号焼土坑からガラス小玉が出土した。遺構の時期は不明である。



第33图 469番地調査地点平面図 (1/100)



第34図 焼土坑・集石遺構実測図 (1/20)

③その他の遺構 (第33図)

その他の遺構として多数の柱穴群を検出している。多量の土器片が出上しているが細片ばかりで図示し得なかった。

出土遺物 (図版30、第35図)

469番地からはピットから出土した遺物が若干ある。弥生時代中期の土器が多いが、摩滅したものが多く、遺構の時期を決するには心もとない。焼土坑からはガラス管玉片 (第44図) 等が出土している。

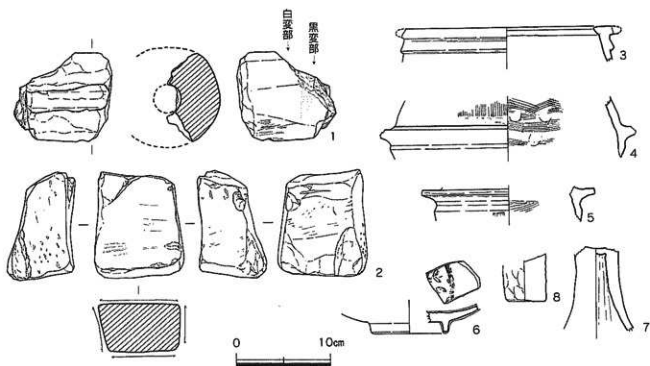
1は、羽口片で、送風口部と思われ、先端部は黒変、ガラス化し、それよりやや内側に粘土が溶着したような白変部が残っている。炉壁体の厚さを示すものであろうか。残存長10.4cmを測り、半裁状態で遺存する。送風口の復元径は11.0cm、内径は2.9cmほどである。表面は丁寧なナデで仕上げられる。色は褐色を呈し焼成良好である。

2は、砥石である。砂岩質で破損面を除き全ての面に使用痕が残る。長さ11.2cm、幅8.0~9.4cm、厚さ5.1~7.0cmを測る。

3、7は、弥生土器で3は甕の口縁部である。口縁端部は欠失している。逆し字口縁で、胴部は若干膨らむ。復元口縁径は内径で18.2cm。7は高杯の脚柱部である。内面に紋り痕跡が残る。8は土師器の支脚か。

4、5は羽釜片である。4は胴部最大径24.9cm。5は15.7cmを測る。

6は、青磁底部片である。高台8.4cm内面に唐草文が残る。



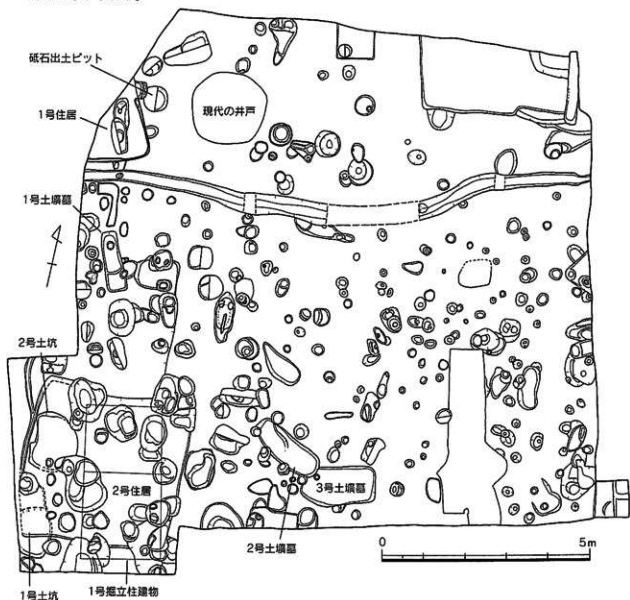
第35図 469番地出土遺物実測図 (1/4)

9. 470-2番地の調査

(1) 調査の概要

調査地点は、王墓とされる南小路道跡の北西約90mに位置している。当該地は、1981年に福岡県教育委員会が調査を行ない、ピットや土坑等の遺構が確認されて弥生時代中期前半と終末期、および布留式期前後の遺物が出土している。また、鍛冶・製鉄関連遺構を検出した本報告書内の469番地地点に隣接している。平成12年度に三雲地区の公民館が新設される計画が持ち上がったことから、調査地点を拡大し遺構の確認を行った。よって、一部1981年調査地点と重なっている。

主な遺構としては、弥生時代の祭祀土坑1、古墳時代の住居2、土坑1、近世の掘立柱建物1と、出土遺物が無く時期は明確ではないが土墳墓3基を検出した。主な遺物は、2号住居出土の鉄状銅製品と、碧玉製管玉4、ピット出土の粘板岩製砥石1、祭祀遺構出土の弥生時代中期中葉の祭祀土器等があげられる。



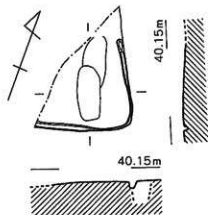
第36図 470-2番地遺構平面図 (1/100)

(2) 住居

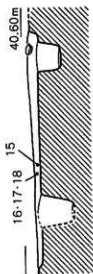
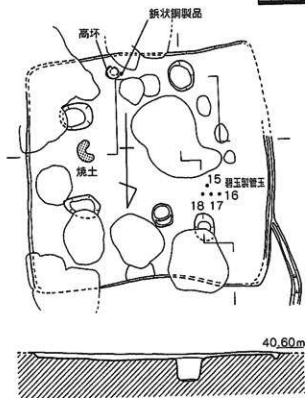
1号住居 (図版23a、第37図)

1号住居は調査区北西隅でコーナー部分が検出したが、ほとんど削平されており周溝が一部残っているのみである。周溝の深さは現存で8~11cm、断面逆台形を呈している。床面は殆ど削られていて、後世の擾乱が入っているため遺構の正確な時期は分らないが、住居のプランが方形であることと、同じプランの住居がすぐ南に隣接していることから、2号住居と同じ時期のものと考えられる。

1号住居



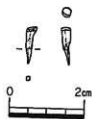
2号住居



第37図 1・2号住居実測図 (1/60)

2号住居（図版23b、第37図）

住居は調査区南東隅に位置し、柱穴、周溝、排水溝等を検出している。近世の掘立柱建物（第41図）による掘乱が多いが、南北3.6～3.9m、東西3.9mのほぼ正方形の住居である。黄色砂質土の地山に暗褐色粘質土の埋土が堆積している。住居南西側に南側に向かって、断面逆台形の排水溝が掘られている。周溝は、断面逆台形で西側のみ確認できた。周溝の深さは床面から6cmほどである。床面はは貼り床があったと思われるが、殆ど削平されているため明確には確認できない。住居は南壁の残りが一番良くて16cmで、北に向かって削平が著しく北壁で2cm程である。住居の東側中央にU字に固まった焼土塊があり、その周辺に炭も多く検出している。炉の痕跡と考えられる。



第38図 2号住居出土鉄状銅製品
実測図（1/1）

住居の南中央部分から、土師器の高杯の杯部が1点出土し、そのすぐ隣の地点から鉄状銅製品（第38図）が出土している。遺物が小さいため取り上げてしまい、レベルを現地で落すとすることができなかったが、高杯杯部底面とほぼ同じレベルから出土した。また、住居西部からは碧玉製の管玉（第44図）が4点出土し、16・17・18はほぼ同じレベルから、15は若干深い地点から出土した。

出土遺物（巻頭図版2、図版30、第38図・第43図・第44図）

鉄状銅製品（第38図） 鉄状銅製品は、長さ0.95cm、幅は中央部で0.2cm、上部で0.25cm。先端は尖っており、何かに打ちつけて曲がったり折れたりしたような痕跡は見られない。頂部は押し潰したように平坦面が作られており、若干頂部が幅を持つ。断面は隅丸の正方形。緑青は頂部から下位までみられるが、下半部分には少ない。成分はほぼ純銅に近く青銅に比べ柔らかかったと思われる。何かを留めておくような機能よりもむしろ、飾り鉄のような役割で使用されたものだろう。分析では金の反応も出ているため金鍍金の可能性もある。

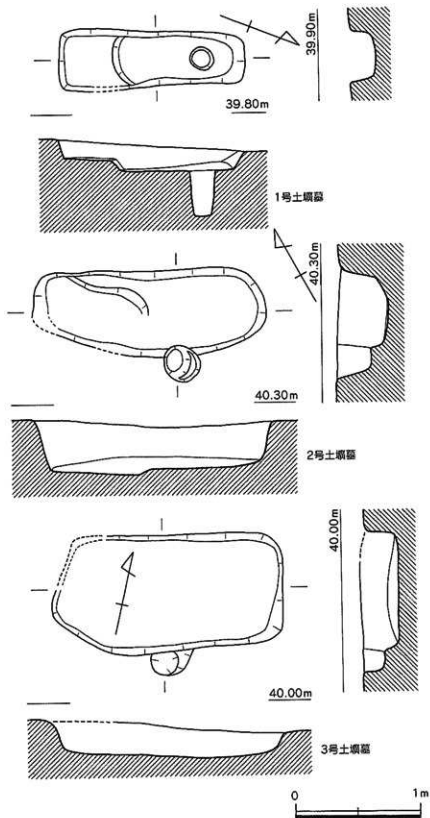
玉類（第44図） 16は長さ2.0cm、径0.39cm、孔径0.17cmで暗緑色。17は長さ2.2cm、径0.38cm、孔径0.18cmで暗緑色を呈す。18は長さ1.64cm、径0.42cm、孔径0.18cmで色調は暗緑色。19は長さ1.7cm、径0.4cm、孔径0.17cmで暗緑色。穿孔は全て両側穿孔で、表面に傷が多い。

土器（第43図） 20は高杯の杯部で、口径18.1cm、調整は外面ヨコナデ、内面ナデと指押さえ痕が残る。内面のナデは幅7～8mmの板状工具で胴部付近までヨコナデを行なっている。この個体の横より鉄状銅製品が出土している。21は高杯の口縁部である。口径14.2cmで外面は風化していて調整は不明だが、内面は指押さえののちに、ヨコハケを施している。22は高杯の脚部で底部の部分で屈曲する。底径は12.5cmで、調整は外面が風化しているが、内面は左から右の横方向のケズリが観察できる。

（3）土墳墓

1号土墳墓（図版24a、第39図）

土墳墓は調査区の中央西隅で検出し、長径144cm、短径40～50cmで、深さ11.6cmの細長い隅丸長方形プランをもつ。断面土墳墓内のピットは、おそらく後世の掘乱と考えられる。土墳墓底面は2段になっている。出土遺物は無いため、時期は不明である。



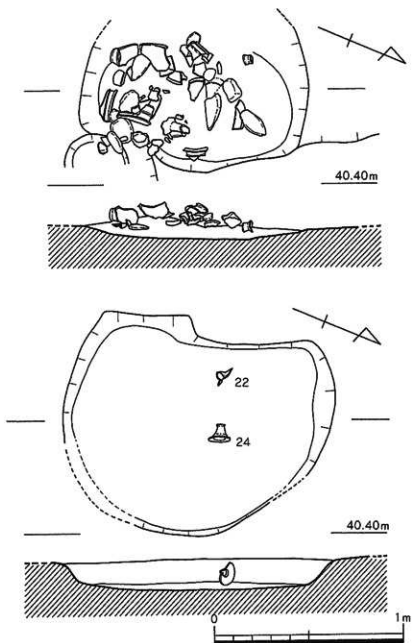
第39图 1·2·3号土壺実測图 (1/30)

2号土墳墓 (図版24b、第39図)

土墳墓は調査区の中央南隅で検出し、長径180cm、短径66cm、深さ29.8cmの長楕円形プランをもつ。3号土墳墓を切る。北側に緩やかな落ち込みがある。遺物が出土していないため時期は不明である。

3号土墳墓 (図版24c、第39図)

3号土墳墓は2号土墳墓に先行して作られており、長径180cm、短径90~94cmの幅の広い隅丸長方形のプランをもつ。他の2つに比べると平面形が異なり幅の広い形である。遺物は時期決定を行えるものが出土していないため時期は不明である。



第40図 1・2号土坑実測図 (1/20)

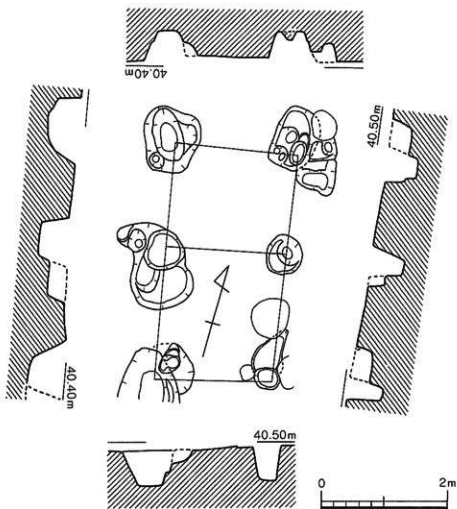
(4) 土坑

1号土坑 (図版25a、第40図)

土坑は調査区南西端に位置し、2号住居の下から検出した。土坑は楕円形で、上面は住居によって掘削されているため残りが悪い。土坑の南北径は120cm、東西径は西側を削平されているため分からないが、現存で72cmである。土坑内から、弥生時代中期中葉～後半にかけての丹塗りの祭祀土器が一括して出土している。出土遺物はすべて遺構の底面よりも6～8センチほど上面で検出している。器種は、丹塗りの甕、広口壺、高坏、蓋、小型の甕等が出土している。

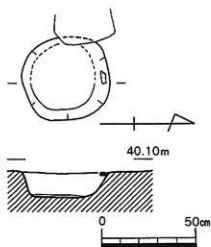
出土遺物 (第43図)

1～13は甕の口縁部である。個体数は多いものの、同一個体はなく、口縁が一周するものもない。1は口径30.6cmで、外面は板ナデで、口縁部はヨコナデ、内側は風化している。2は口径27.4cmで、外面調整は丁寧なヨコナデ、内面は指押さえ痕が残る。2は口縁部がやや未発達で古い傾向を示している。3は口径30.3cmで、外面調整は風化しており、内面調整はナデ。口縁部分はヨコナデを施している。4は丹塗り磨研の甕の口縁である。口径は30.7cm。外面調整は突帯以下はヨコミガキで、口縁部はヨコナデ。内面調整もヨコミガキで丁寧なつくり。丹が厚く残存している。5は口径27.6cmで、外面調整はナデ、内面はナデと指押さえ痕が残る。6は口径28.6cm



第41図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)

で、内外面ともにナデ調整。口縁部頂部に赤色顔料が残る。7は口径32.1cm。口縁部周辺はヨコナデ。内面に張り出さずに外面に大きく張り出し、やや内傾することから時期は中期後半に入るだろう。8は口径24.6cmで外面ナデ、内面は風化している。口唇部は指押さえ痕が残る。やや未発達。口縁部と突帯でやや古い時期のものだろう。9は口径23.3cmで、外面は風化しているがタテハケが施されていたようである。口唇部は指押さえ、内面は板ナデ。10は口径は26cmで、内外面ともに風化しており調整は観察不可能。11は口径21.2cmで、外面は粗いハケで内面は指押さえ痕が残る。12は口径28.1cmで外面調整はタテハケで内面指押さえ痕が残る。外面下半には煤が付着している。14は口径29cmで、外面調整はタテハケ、内面は指押さえ痕が残る。薄くて堅牢なつくり。口縁部内側に黒斑がのこる。15から17は高杯の杯部と脚部である。15は口径23cmで内外面ともに横方向のミガキが残る。口縁部外面が膨らみ厚ぼったくなっている。16も同じ高杯で口径は推定で21cmになる。ヨコミガキが内外面ともに残る。胎土は15・16ともに精良である。17は高杯の脚部から杯部で、内外面ともに丹塗りである。杯部は内外面ともに横方向のヘラ研磨で、脚部は縦方向のヘラ研磨調整である。脚部内面はシボリ痕が残る。18は蓋で天井部径は6~6.1cmで、外面タテハケ、内面板ナデである。19はミニチュア土器の甕で口径は8.2cmで、調整は外面ヨコハケ、口縁部はヨコナデ、内面は風化している。



第42図 磁石出土ピット実測図 (1/20)

径29cmで、外面調整はタテハケ、内面は指押さえ痕が残る。薄くて堅牢なつくり。口縁部内側に黒斑がのこる。15から17は高杯の杯部と脚部である。15は口径23cmで内外面ともに横方向のミガキが残る。口縁部外面が膨らみ厚ぼったくなっている。16も同じ高杯で口径は推定で21cmになる。ヨコミガキが内外面ともに残る。胎土は15・16ともに精良である。17は高杯の脚部から杯部で、内外面ともに丹塗りである。杯部は内外面ともに横方向のヘラ研磨で、脚部は縦方向のヘラ研磨調整である。脚部内面はシボリ痕が残る。18は蓋で天井部径は6~6.1cmで、外面タテハケ、内面板ナデである。19はミニチュア土器の甕で口径は8.2cmで、調整は外面ヨコハケ、口縁部はヨコナデ、内面は風化している。

2号土坑

2号住居内に切り込む不整形の土坑で、南北径144cm、東西径100cm~114cmである。遺物は高杯の脚部が2点出土した。

出土遺物 (第43図、23・24) 23は底部で屈曲する形態の脚部で、外面調整はナデ、内面調整はケズリ(左から右方向)である。24は完形の脚部で外面はナデ、内面は工具痕や指押さえ痕が残る。

(5) その他の遺構

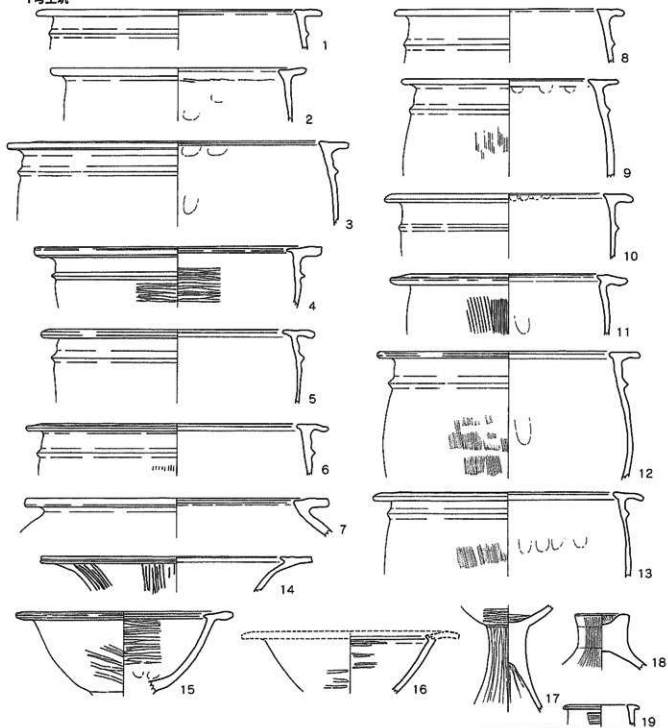
掘立柱建物 (第41図)

2号住居の上に位置し、1間×2間が現状で確認できる。南北方向の柱の間隔は2m前後で、東西方向も2mである。調査区の南西端で検出されたため、本来はさらに西側に広がる可能性がある。それぞれの柱穴には、片側に一段低く掘り込まれた土坑状の遺構が見られるが、これらは柱の抜き取り痕の可能性が高い。出土遺物は、図化できるものが少なかったが、近世の陶磁器片が混入していることから、この時期のものと考えたい。

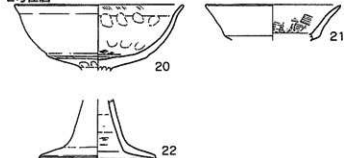
ピット (第42図)

1号住居東側の隅丸方形ピットから、粘板岩製の仕上げ磁石が出土した。磁石はピットの北壁最上面から出土し、砥ぎ面が明瞭に残っている面を下向きにして、ほぼ水平な状態で検出した。ピットは断面逆台形状を呈している。

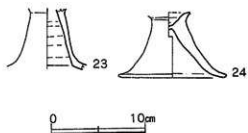
1号土坑



2号住居



2号土坑



第43图 470-2番地出土土器实测图 (1/4)

10. 出土石器、鉄器、玉類

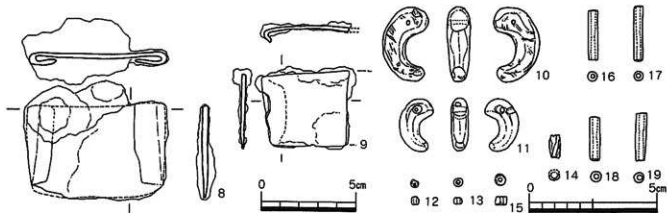
石器 (図版30、第45図)

1は、455番地の1号溝から出土した滑石製のし字形石杵である。表面は、全体に敲打痕と、その後には施された丁寧な研磨痕が明瞭に残る。一部下半部に鋭利な工具で成形した痕跡が残る。主に上部は縦方向に、下半部は横方向に研磨され、特に、し字に屈曲した部分を強く横方向に研磨し成形している。下部の磨り面は幅2.2~2.4cmほどで、緩い円形のカーブを持つ平滑な面である。使用して磨り減った痕跡は見られないことから、完形の未使用品で、墳丘墓への供献品と考えられる。長さ20.5cm、幅14.5cm、厚さ6.0cm、重さ2.32kg。2は470-2番地ピット内出土の粘板岩製の手持ち用仕上げ砥石である。全面を使用し、よく使用した面は凹面状になる。現状の長さ9.8cm、幅3.3cm、厚さ1.9cm。3も470-2番地ピット内出土のサヌカイト製打製石斧で、上部に柄を紐で括ったと思われる凹みと紐ずれ痕がある。4は436番地の埋土内から出土した、片面を凹状に研磨加工した不明石器である。外形はし字形石杵に似ているが、薄さと重さから石杵としての使用は考えにくく、その他の用途を考えたい。6、7とも455番地出土の結晶片岩製石製紡錘車である。6は古墳時代の祭祀土坑内より出土し、直径4.4cm、厚さ0.45cm、孔径0.48cm。7は1号溝内より出土し、直径4.6cm、厚さ0.5cm、孔径0.43cm。8は455番地1トレンチ表土より出土した凝灰岩質石材の石砲丁で、孔は両側穿孔である。長さ6.5cm、幅4.6cm、厚さ0.75cm、孔径0.6cm。9は470-2番地の2号住居より出土した輝緑凝灰岩製石砲丁で、刃部が僅かに残る。長さ4.2cm、幅3.9cm、厚さ0.4cm。

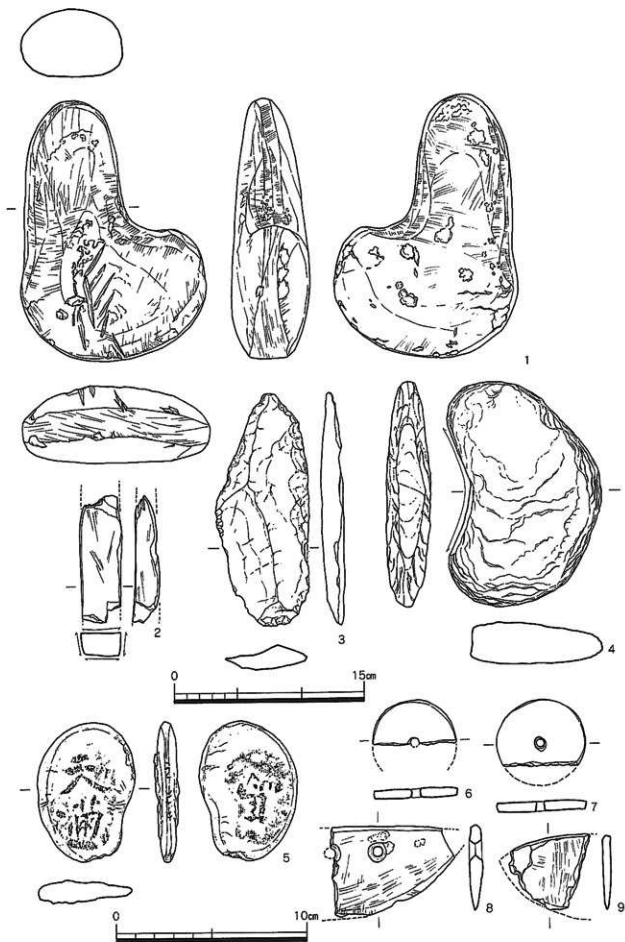
鉄器、玉類 (図版30、第44図)

8は455番地の1区1号溝から出土した、両端に折り返しをもつ鍛造鋤先である。長さ6.9~7.3cmで幅4.9cm、厚さ推定0.3mmほどで、刃部はあまり明瞭ではないがほぼ完形である。9は、455番地1区2号溝埋土より出土した鍛造鋤先で、右半分は欠損している。端部の折り返し部分も先端部は殆ど欠損している。刃部は比較的残りがよく明瞭。幅は3.8cmで長さは現存で4.8cm。

10、12、14は469番地出土。10は表採で碧玉製勾玉。長さ2.95cm、幅1.55cm、厚さ0.9cm。12と14は焼土坑の炭層から出土した。12は濃いブルーの小玉で径0.34cm、厚さ0.32cm。14は半裁した管玉で淡い青緑色で、長さ0.9cm、幅0.42cm。11は455番地の古墳時代祭祀土坑出土の碧玉製勾玉で暗緑色を呈す。長さ2.1cm、幅1.3cm、厚さ0.7cm。13は455番地包含層内出土の淡青色のガラス小玉で、径0.37cm、厚さ0.26cm。15は1264番地(市道)9号住居下層出土の滑石製の白玉で、径0.44cm、厚さ0.32cm。15~18の詳細は47ページに記述しているのでここでは省略する。



第44図 南小路遺跡出土鉄器・玉類実測図 (1/2、2/3)



第45图 南小路遺跡出土石器実測図 (1/3、1/2)

11. 出土品の自然科学分析結果

(1) 三雲・井原遺跡出土遺物の保存科学的調査について

比 佐 陽一郎 (福岡市埋蔵文化財センター)

三雲・井原遺跡から出土したガラス製の玉類と鋳状銅製品について、材質を中心とする調査を行った。

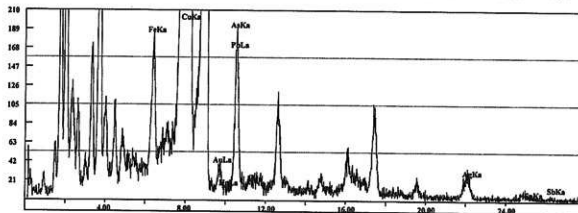
出土ガラスは先学による調査・研究により、その流通や変遷などが明らかにされつつあり、本市でも関連データの蓄積を進めている。

今回対象とした資料は469番地出土の青紺色小玉及び淡青緑色管玉各1点、455番地出土の淡青色小玉1点の計3点である。アルキメデス法により測定した見かけの比重は、小玉が2.53、2.51であるのに対し、管玉のみが3.20と、やや高めの数値を示しており、組成の違いを予測させる結果となった。また実体顕微鏡による観察でも、小玉では連続する気泡列や引き延ばされた気泡筋等が見られ、引き延ばされた管ガラスを分割し、再加熱して作られているが、管玉では孔を取り巻くように見られる螺旋状の蝕像から、何らかの心棒に溶融したガラスを巻き付けて作られたと考えられ、製作技法状においても違いが見られる。

材質調査は蛍光X線分析法にて実施した。この方法は資料にX線を照射し、含有する各元素から発生する二次X線(特性X線)を検出器でとらえてX線エネルギーとその強度をピークとして表すものである。今回は対象資料が小さいことと、資料の保護を目的として、X線強度が小さくても検出感度の優れた微小領域用エネルギー分散型の装置(エダックス社製/Eagle μ probe)を用いた。また、本来、詳細な調査を行うには、風化部分を取り除き、更に標準資料を用いた校正から成分の定量値を求める必要があるが、今回は非破壊による定性分析のみに止めている。このため組成の判別は、得られた蛍光X線の特徴と相対強度から試みている。測定条件は次の通り。

対陰極：モリブデン(Mo) / 検出器：半導体検出器 / 印加電圧・電流：20kV・450~550 μ A / 測定雰囲気：真空 / 測定範囲0.3mm ϕ / 測定時間300秒

分析の結果、青紺色の小玉では、ガラスの主成分である珪素(Si)の他、マグネシウム(Mg)、アルミニウム(Al)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、コバルト(Co)等の元素が検出されている。カリウムが強く現れる特徴は、肥塚隆保氏による分類の二成分系



第46図 南小路470-2番地出土鋳状銅製品の成分分析

系ガラスであるカリガラス (K_2O-SiO_2 系) の特徴を示している。またマンガンも強く現れているが、これは着色要因であるコバルトに伴う不純物で、マンガンを多く含むコバルトは中国産の特徴とされている。

管玉では、アルミ、珪素などの他には、鉛(Pb)とバリウム(Ba)のピークが顕著に現れており、鉛バリウムガラス ($PbO-BaO-SiO_2$ 系) に属することが分かる。

淡青色の小玉は、やはりカリウムが強く現れる特徴から、カリガラスと考えられる。青紺色との違いは、コバルトが検出されず銅(Cu)が強く現れている部分に見られ、この部分が色調の違いに反映されるものと考えられる。

カリガラス、鉛バリウムガラスは、共に弥生時代に盛行し古墳時代には廃れるとされる。これまで筆者らが調査を行ってきた弥生時代に属するガラス玉でも、材質や製作技法において同様の結果が得られており、本例もこの時代のガラスの特徴に当てはまる資料と言える。

続いて銅製品であるが、これについても組成や含まれる微量元素による製作地、或いは製作技法の検討の進むことが期待される。

本資料も非常に小さいことから、分析にはガラスの場合と同じ装置を用いた。検出元素の関係からX線の励起電圧を40kV、電圧を20~70 μ Aに設定した以外は、上記と同条件で作業を行っている。この方法ではX線が照射された範囲の表面的なデータしか得られないため、出土品の非破壊分析では、製作時や腐蝕による元素の偏析、或いは表面処理などが想定される金属製品、特に合金の場合、データの評価に注意が必要である。ここでは平尾良光氏が行っているような、主要元素のX線強度を100とした場合の各元素の相対強度で結果を表すこととする(表1)。

4ヶ所のポイントで分析を行っているが、各元素の強度に若干のバラツキは見られるものの、定性的に違いは無いようである。銅(Cu)が飛び抜けて強く現れ、鉛(Pb)も検出されているが、青銅器に一般的な錫(Sn)は殆どピークとして確認することはできない。全ての箇所と同じ傾向を示す点や、これまで少ないながらも分析を行ってきた経験からは、素材の偏析によるものとは考えにくく、本来の成分を反映した結果と判断したい。この他、金(Au)、銀(Ag)のピークが低いながらも現れている。銀は青銅器の微量元素として一般的であるが、ピークが比較的大きく、金も検出されていることから別の要因が考えられる。金に隣接する高エネルギー側にピークとして判別できるかどうか分からないほどの突出が見られるが(図1)、この部分は水銀(Hg)に同定される部分であり、これが間違いなければ鍍金の可能性が考えられる。顕微鏡観察でも明らかに土とは異なる黒色の付

第1表 三雲470-2番地出土鉄状銅製品の分析表

測定部位	(keV)										主元素の X線強度 (cps)
	Sb-K α 13.5	Sn-K α 14.0	Ag-K α 22.0	Pb-L α 10.5	As-K α 10.5	Hg-L α 9.9	Au-L α 9.7	Cu-K α 8.0	Fe-K α 6.4		
point1 頭部任意	+	+	0.12	1.04	0.10	+	0.14	100.00	2.10		5643.10
point2 脚部	+	+	0.16	0.59	0.06	+	0.12	100.00	0.70		5627.28
point3 頭頂部 (直立させて測定)	+	+	0.14	0.62	0.12	+	0.11	100.00	0.56		5602.23
point4 脚部	+	+	0.32	0.92	0.18	+	0.18	100.00	1.17		5443.33

+は相対強度が0.1未満であったが、存在が想定されるものを示す

着物がみられるものの、鍍金が否かは判然としない。

本例は、これまで調査を行ってきた弥生～古墳の青銅器とは組成が異なるもので、非常に軟らかく作られていると考えられる。ここでは紙幅の関係上、事実報告のみに止めるが、錫が殆ど見られない組成での呼称（「青銅器」或いは「銅製品」）、或いは何を何処に固定するのに用いたのかといった用途の問題、更には鍍金の存在を裏付けるための調査等については、今後、機を改めて検討を加えたい。

最後になりましたが、貴重な資料の調査・報告の機会を与えていただいた、前原市教育委員会岡部裕俊氏、牟田華代子氏に感謝申し上げます。

参考文献

- 肥塚隆保1996「化学組成から見た古代ガラス」『古代文化』第48巻8号 財団法人古代学協会
肥塚隆保1998「主成分からみた古代ガラスとその歴史的要因」『保存科学研究会1998』奈良国立文化財研究所
小瀬康行1987「管切り法によるガラス小玉の成形」『考古学雑誌』第73巻第2号 日本考古学會
平尾良光編1999『古代青銅器の流通と製造』鶴山堂

(2) 前原市三雲南小路遺跡出土赤色顔料について

本 田 光 子 (別府大学)

前原市三雲南小路遺跡出土のL字形石柁と赤色物が付着した土器について、顕微鏡観察と蛍光X線分析（別府大学設置：エネルギー分散型蛍光X線装置MES A500）により下記のとおり調査を行なった。

L字状石柁（第44図）

上記の方法により、詳細な観察と分析を行ったが、今回は、朱やベンガラ等の赤色顔料と考えられる赤色物の付着残存は認められなかった（巻頭図版2-a参照）。L字状石柁は従来からの調査により赤色顔料のうち特に朱に関わりをもつ石器と考えられる。顕著な擦痕を残す底面だけでなく、握部等にも量の多少はあるもの朱が残存する例が多い。本例に朱が認められないことは、今まで白にあたる石器が共伴しないことに加えて、L字状石柁の製作目的や使用方法を考える際に更に大きな意味を持つ。

赤色物が付着した土器（巻頭図版2-b参照、NO26は第11図-25）

上記の方法により観察と分析を行った結果から推定される赤色の由来を下記の表に示した。全資料とも内面に付着残存する赤色物は朱である。外面に朱が付着しているものと、そうでないものがあるが、両者ともひび割れ内に朱が認められ、内か外面に煤が付着するものもあり、内面朱付着土器の特徴が認められる。

まとめ

石柁、内面朱付着土器とも儀礼の在り方、儀礼の中での朱の用いられ方等を考えていく上で、重要な資料であり、出土状況なども含めて今後も調査検討を重ねたい。

第2表 赤色顔料が付着した土器（土器番号は巻頭図版2-bを参照）

No	外 面		内 面		No	外 面		内 面	
	ベンガラ	朱	ベンガラ	朱		ベンガラ	朱	ベンガラ	朱
1	△	○	△	○	14	△●	×	×	○
2	×	○	×	○	15	△●	×	×	○
3	△	○	△	○	16	△●	×	×	○
4	×	○	×	○	17	△●	○	×	○
5	△	○	△	○	18	×	○	×	○
6	×	○	×	○	19	×	○	×	○
7	△●	○	△	○	20	×	○	×	○
8	△●	○	△	○	21	×	○	×	○
9	△	○	△	○	22	×	○	×	○
10	×	○	×	○	23	×	○	×	○
11	△●	×	△	○	24	×	○	×	○
12	△●	×	△	○	25	×	○	×	○
13	△●	×	△	○	26	×	○	×	○

△：いわゆる酸化鉄粒有り ●：いわゆる丹塗り ○あり ×なし

Ⅲ. おわりに

三雲南小路遺跡周辺の地形と遺構の分布

三雲南小路遺跡はこれまでの調査で、ヤリミゾ・上覚・上学地区から延びる微高地の北東端緩斜面上に立地することが明らかとなった。470-2番地では、北に急な下り勾配となっており、このあたりが微高地の先端部にあたるものと推定される。

南小路、上学、上覚、ヤリミゾ地区では弥生後期から古墳中期にかけての竪穴住居群、弥生終末～古墳前期の墓群が確認されている。1264番地（市道）、469番地、470-2番地においても竪穴住居が確認され、南西から続く集落の範囲が南小路地区の西部まで広がっていることが確認された。また、この地区では確実な遺構は少ないものの、弥生中期の土器が各所で出土していることから、かつて当該期の集落が存在したことは確実であり、三雲・井原遺跡周縁部における弥生時代中～後期の集落の展開を探る上で興味深い。

469番地では焼土坑から鉛バリウムガラス製の管玉、カリガラス製の小玉が出土した。調査中にはガラス生産に関連する遺構の可能性を検討したが、焼土坑の時期を確定できず、また、ガラス生産に関連する遺物を他に確認することができなかった。焼土坑は現時点では弥生時代の遺構とするより周辺で検出した中世鍛冶に関連する遺構である可能性が高く、ガラス玉類はこれら後世の遺構への混入と考えられる。ただし、調査地点は三雲・井原遺跡における青銅器等生産エリアと推定される屋敷、井ノ川地区に近く、470-2番地で鋳状銅製品が出土しており、今後とも注意を要する。

三雲南小路遺跡の墓域

455番地で確認した1号溝は第2次調査で確認された1～3号溝の北延長線上に位置する。現状で溝幅は概ね4.2～4.7mを測り、断面は逆台形状を呈する。溝は、1264番地（里道）からほぼ真北に延び、2号甕棺の北西17.5mで東に向かって屈曲しており、墓域を示す区画溝（周溝）の様相を呈する。

1号溝の掘削時期について、溝の北岸を切って埋葬された小児甕棺の時期が後期前半であることからこれを測ることは明らかである。また、溝埋土から出土した土器に中期後半のものが含まれることから、溝の掘削時期は1・2号甕棺が埋葬された中期後半～末と考えられる。

2次調査で確認された1～3号溝群との位置関係とも勘案すれば、これらの溝が1・2号甕棺の西、北側の区画溝（周溝）の一部と考えられ、北溝と仮称する。

そこで第2次調査の成果について再度検討してみる。第2次調査において1～3号溝（西溝）の西に南北方向に直線的に延びる低い段落ちが検出されている。遺構配置図に実線と点線で表示されているが、455番地2トレンチでも、この段落ちの北延長上に深さ約20cmの段落ちが検出された。この段落ちについて報告書では詳述されていないが、第1、2次調査の西溝（2号溝）の西岸とほぼ並行して北に延びていることから、これが区画溝の東岸である可能性がある。

南区画溝の存否については、436番地の調査によって現市道以南に達していないことが明らかとなり、第1次調査の甕棺南の土壌（祭祀溝）が墓域南端の区画溝の一部である可能性が高まった。

435番地、1265番地の東溝について、弥生中期中葉の祭祀土坑を切り、古墳時代前期の方形土壇に切られていることから弥生時代の溝であることは確実である。溝の性格については、埋土に砂礫等を含まず粘質土が堆積しており、近隣の類似遺構の調査成果から水路遺構とは考えられない。また、溝の断面が逆台形上を呈しており、西、北溝と類似すること、西溝と並行することから三雲南小路遺跡の東区画溝と推定した。しかし、溝埋土から遺物がほとんど出土しなかったため溝の掘削、埋没時期が定まらないうえ、北東および南東コーナーが確認できていないため、区画溝と結論付けるにはやや資料不足の感がある。この課題の解決は将来の調査に委ねたい。

現段階では、三雲南小路遺跡の墓域は、西溝、北溝、東溝、南（祭祀）溝によって規定される溝の内側で東西32m、南北31mほどの不整長方形プランを呈するものと考えられる（第47図）。

455番地では周溝を切って甕棺墓、土壇墓も確認された。また、470-2番地からも弥生時代と推定される土壇墓群が発見されたことから、三雲南小路遺跡の北にさらに弥生中～後期の墓群が分布することが判明した。三雲南小路遺跡の構造を検討する上で今後注意を要する。

石柁と内面朱付土器

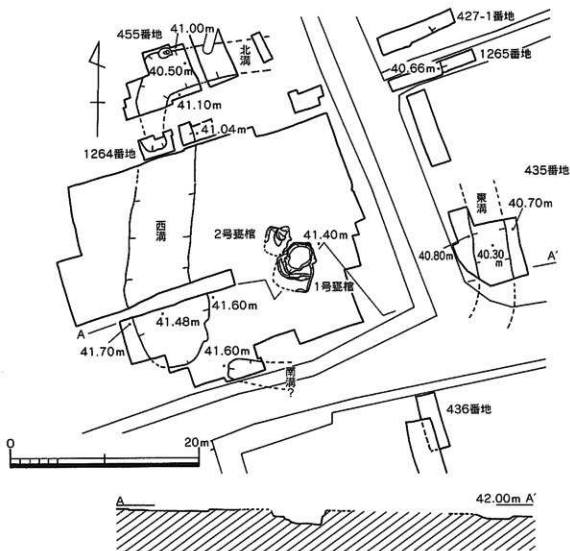
朱付土器と石柁が北溝の北西コーナーから出土した。土器は溝埋土の上層から出土し、底部、口頸部を打ち欠き、あるいは穿孔されたものが多い。土層断面では明確にすることができなかったが、1号溝の埋没後に新たに掘削された祭祀土坑（溝）があるものと推定される。これまでの西溝での調査成果と合わせ、三雲南小路遺跡では1・2号甕棺の埋葬後、長期にわたり墳墓への祭祀が繰り返されていたことを物語る。

石柁はこれまでの同種資料の出土例などから赤色顔料の精製用具と推定される。しかし、今回出土した石柁は滑石質の軟質石材を用いた完形品で、整形時の研磨痕は明瞭に残るものの、詳細な表面観察を行ったにもかかわらず表面からは顔料の付着が全く確認されなかったことから、未使用で

あった可能性が高い。祭祀に伴う供献品であろうか。当該期の祭祀のあり方を検討する上で興味深い。

また、トレンチ周辺から出土した朱付着土器も注目される。鉢（第11図25）に付着した朱は土器内面のひびの奥深くまで浸透しており、かつ、口から溢れたような状態もみられることから、土器に多量の朱が混ざった液体が満たされていたものと推定された。土器は破砕しているものの完形近くまで接合復元が可能であり、区画溝（あるいは溝内に掘られた祭祀土坑）内に破砕供献されたものと考えられる。この他、内外面に朱が付着するもの、あるいは煤が付着するものもあり（巻頭図版2b）、その使用方法については今後とも注意を要する。

- (註) 1. 角造行 1997 『三雲・井原遺跡群Ⅰ』 前原市文化財調査報告書 第63集 前原市教育委員会
 2. 柳田康雄編 1985 『三雲遺跡 南小路地区編』 福岡県文化財調査報告書 第69集 福岡県教育委員会



第47図 三雲南小路遺跡遺構配置と断面概略図 (1/400)

圖 版

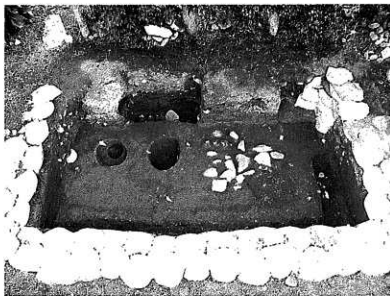




a 1264番地（里道）調査地点全景



b 同上（東から）



a 1トレンチ (南から)



b 2トレンチ (東から)



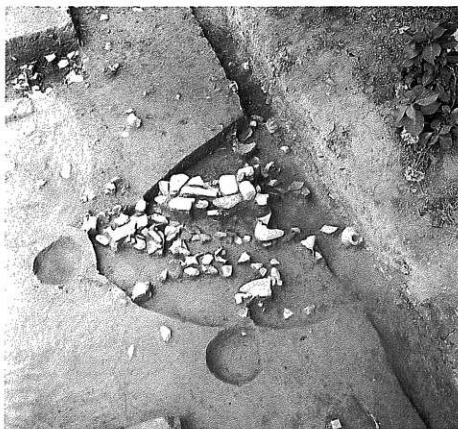
c 3トレンチ (東から)



a 455番地全景（真上から）



b 同上（北から）



a 1号溝北西コーナー上層遺物出土状況



b 同上 石片出土状況近景



a 1号溝bトレンチ土器出土状況



b bトレンチ大型壺胴部出土状況



c 同上 石製紡錘車出土状況



a 1号溝bトレンチ上層土器出土状況



b 1号溝aトレンチ土層断面



a 古墳時代祭祀土坑上層土器出土状況



b 古墳時代祭祀土坑下層土器出土状況



c 1号溝bトレンチ土層断面



a 墓棺墓出土状況（北から）



b 同上（東から）



a 2区土坛墓



b 2区集石遗構



a 3号溝遺物出土状況



b 同上近景



c 3号溝土层断面



a 435番地調査地点全景（北西から）



b 同上（南東から）



a 方形土坑検出状況



b 鳥足状夕夕半韓式土器出土状況



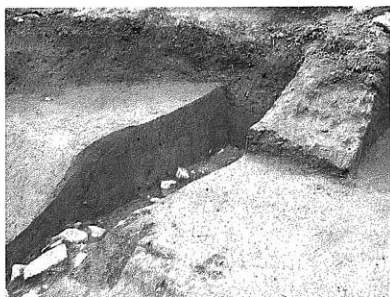
c 土師器壺出土状況



a 東溝土器溜り弥生土器出土状況（北西から）



b 同上（北から）



a 東溝西岸付近土層断面



b 東溝中央、北壁土層断面



c 東溝土層断面



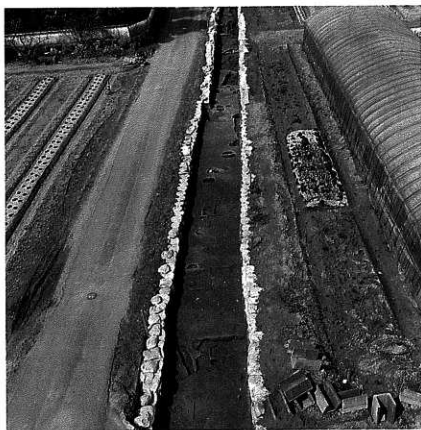
a 436番地トレンチ全景



b 1265番地トレンチ全景



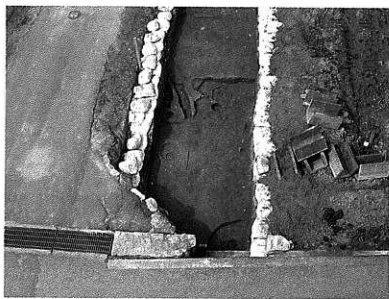
c 同上 南壁土層断面



a 1264番地 (市道) 全景 (西から)



b 同上 近世溝完掘状況 (北から)



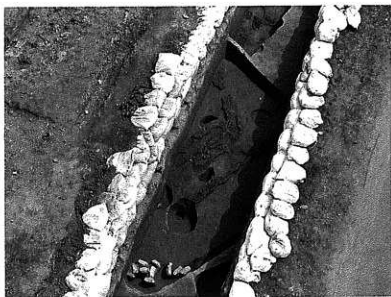
a 1号住居（南から）



b 1号住居カマド周辺土器出土状況



c 3号住居（北西から）



a 4号住居 (北から)



b 4号住居炭化木、土器出土状況



c 1号土坑 (北から)



a 9・10・11号住居 (南から)



b 9号住居 (南から)

a 9号住居土器出土状況①
(北から)

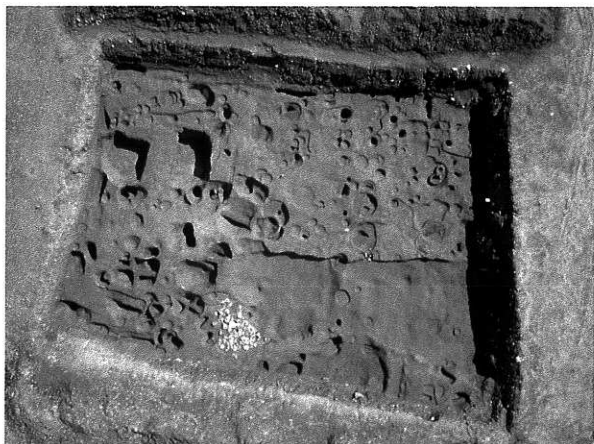


b 9号住居土器出土状況②
(西から)

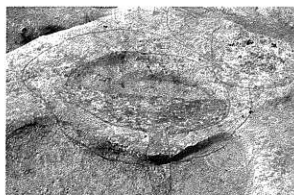


c 9号住居土器出土状況③





a 469番地Ⅱ区全景 (上から)



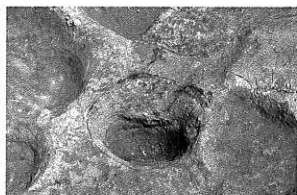
b 1号焼土坑



c 2号焼土坑



d 3号焼土坑



e 4号焼土坑



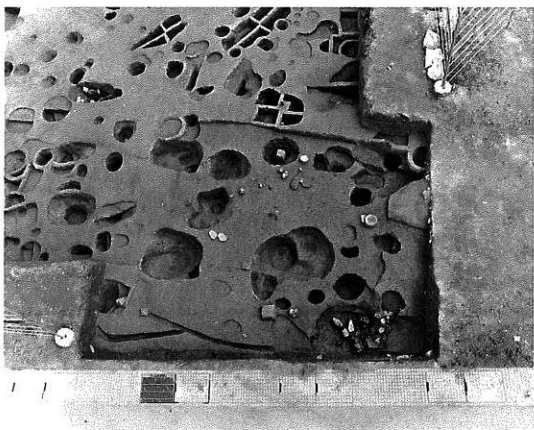
a 集石遺構



b 470-2番地全景 (西から)



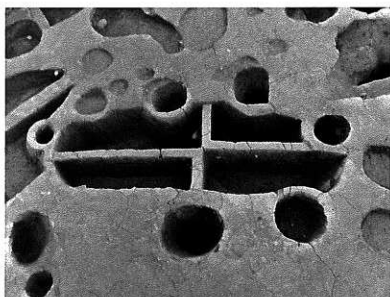
a 1号住居 (西から)



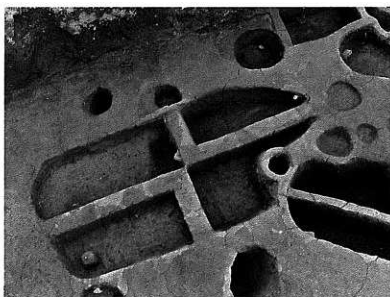
b 2号住居 (西から)



a 1号土墳墓 (東から)



b 2号土墳墓 (北から)



c 3号土墳墓 (北から)



a 1号土坑土器出土状況（東から）



b 2号土坑（西から）

1号溝



1



7



16



40



25



41



10



11



12

1号溝



14



32

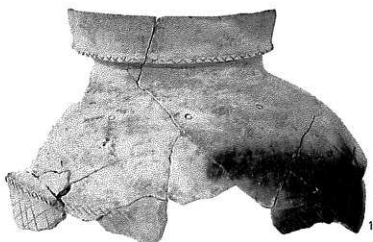


27



29

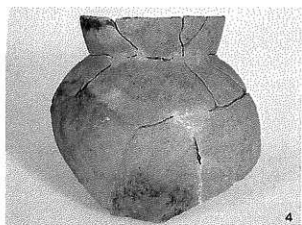
祭祀土坑



1



2



4



6

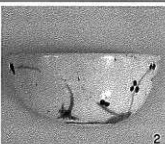


7

3号溝



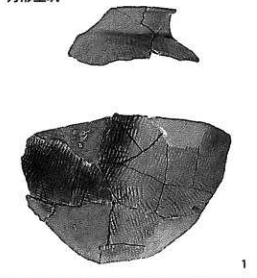
1



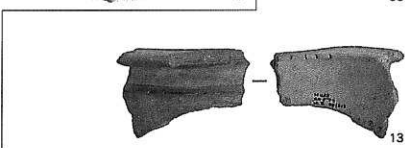
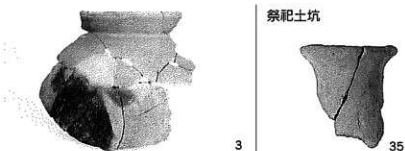
2

出土遺物②

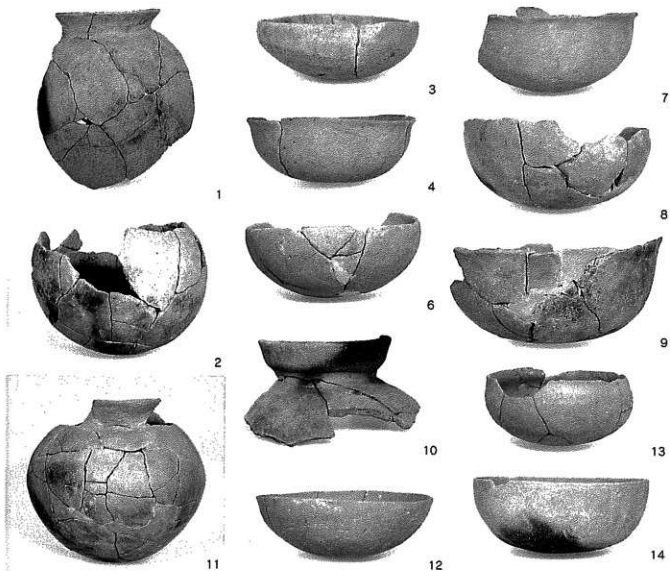
方形土坑



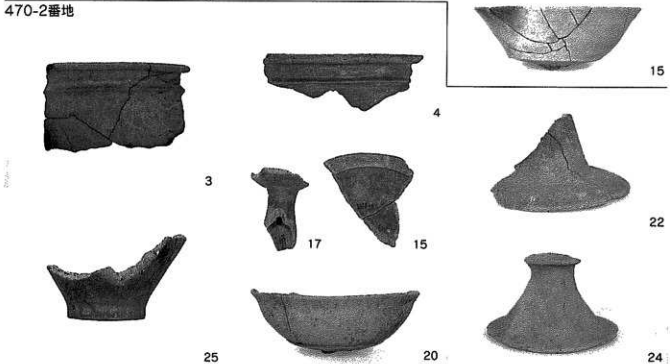
祭祀土坑



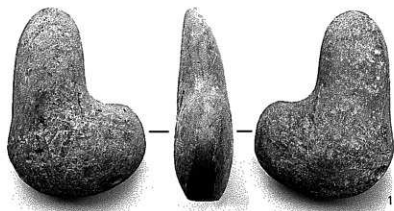
1264番地 (市道)



470-2番地



出土遺物④ (1264番地 (市道) - 470-2番地)



1



6

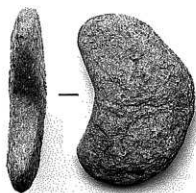


7

鉄状銅製品

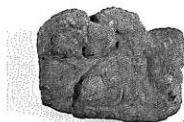


469番地出土砥石



4

甕棺墓出土石泡丁



8



9



10



11

● 12

● 13



14



15



5



16



17



18



19

469番地出土羽口



報告書抄録

フリガナ	ミクモ・イワライセキ ミナミシヨウジチクヘン							
書名	三雲・井原道跡 南小路地区編							
副書名	前原市文化財調査報告書							
巻次	第78集							
シリーズ名	三雲・井原道跡群							
シリーズ番号	Ⅱ							
編集者名	牟田華代子 岡部裕俊							
編集機関	前原市教育委員会							
所在地	福岡県前原市前原西一丁目1番1号							
発行年月日	西暦2002(平成14)年3月29日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収道跡名	所在地	市町村	道跡番号					
三雲・井原道跡	①福岡前原市大字4221264番地(里道)			33°32'00"	130°14'21"	平成12年5月22日～平成12年9月22日	30㎡	重要道跡確認調査
	②同上455番地					平成12年7月～平成12年9月	200㎡	
	③同上435番地					平成12年11月1日～平成12年12月20日	70㎡	
	④同上436番地					平成12年11月1日～平成13年1月5日	20㎡	
	⑤同上1265番地					平成13年1月	13㎡	
	⑥同上1264番地(市道)					平成12年3月21日～3月30日	100㎡	緊急調査
	⑦同上469番地					平成9年3月～平成9年7月	179㎡	緊急調査
	⑧同上470-2番地					平成13年1月16日～平成13年3月30日	210㎡	重要道構確認調査
所収道跡名	種別	主な時代	主な道構	主な遺物	特記事項			
三雲・井原道跡①	墓 地	弥生 古中 世	溝、近世溝、柱穴	弥生土器、甕棺、石器 ガラス玉、古式土師器 土師皿、青磁	三雲南小路道跡の範囲 の確認調査			
三雲・井原道跡②	墓 地		溝、甕棺墓、土壇墓、 近世溝、柱穴	弥生土器、石件、水銀 朱付岩土器、土師器、 「天満」陽刻環				
三雲・井原道跡③	墓 地		溝、古墳時代方形土 坑、柱穴	弥生土器、古式土師器 埴式土器、土師皿、 白磁				
三雲・井原道跡④	墓 地			石製品				
三雲・井原道跡⑤	集 落		溝	弥生土器、古式土師器				
三雲・井原道跡⑥	集 落		壑穴住居、柱穴、土坑、 中世溝	弥生土器、古式土師器	弥生～古墳時代の壑穴 住居群等を確認			
三雲・井原道跡⑦	集 落		焼土坑、集石遺構、柱 穴、壑穴住居	ガラス管玉、ガラス小玉、弥生土器 陶磁器、埴和口、炭石				
三雲・井原道跡⑧	集 落		壑穴住居、土壇墓、土坑、 柱穴	弥生土器、古式土師器、青玉製管玉 銅板類製品、陶磁器				

三雲・井原遺跡Ⅱ

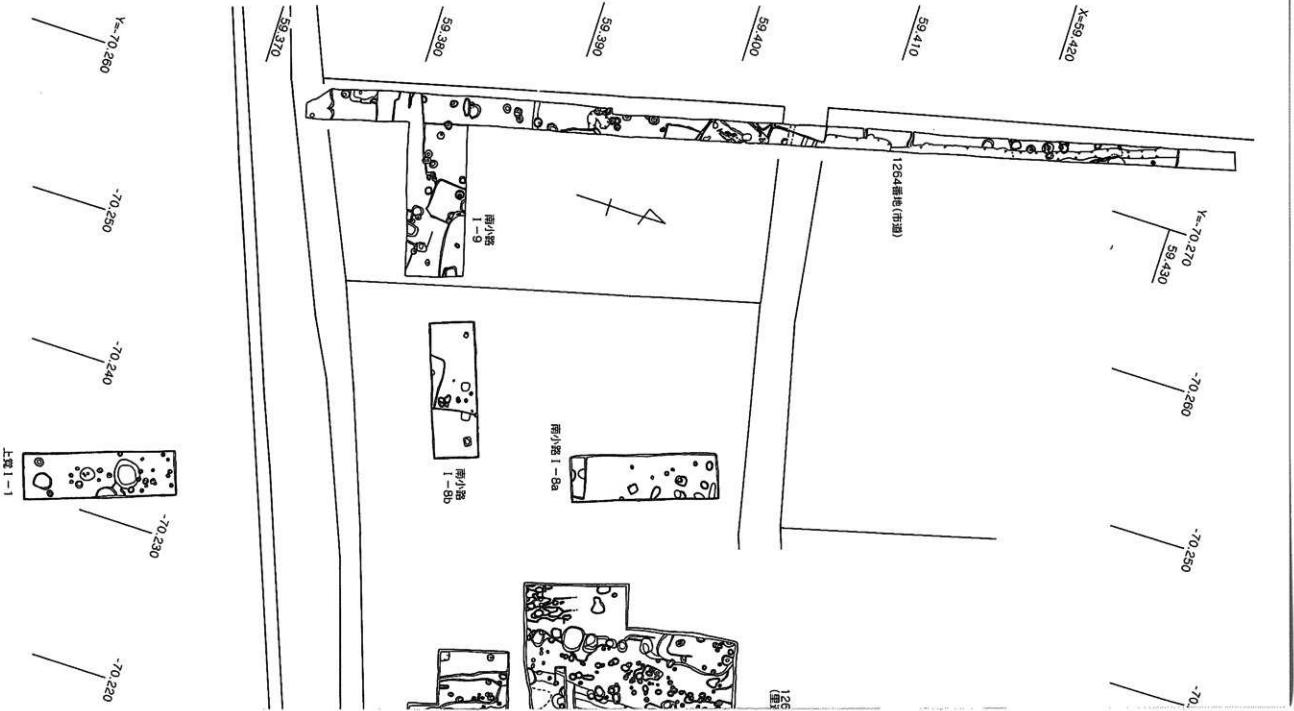
——南小路地区編——

福岡県前原市大字三雲・井原所在遺跡の調査報告
前原市文化財調査報告書 第78集

2002年3月29日

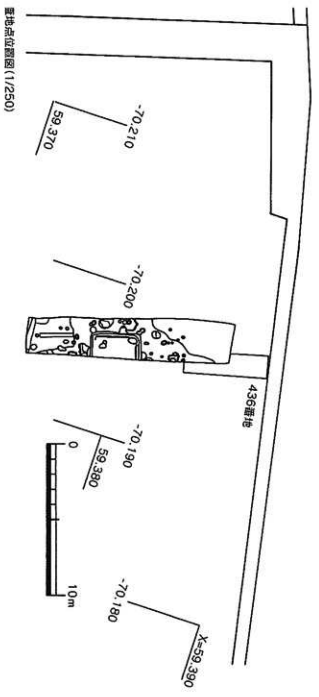
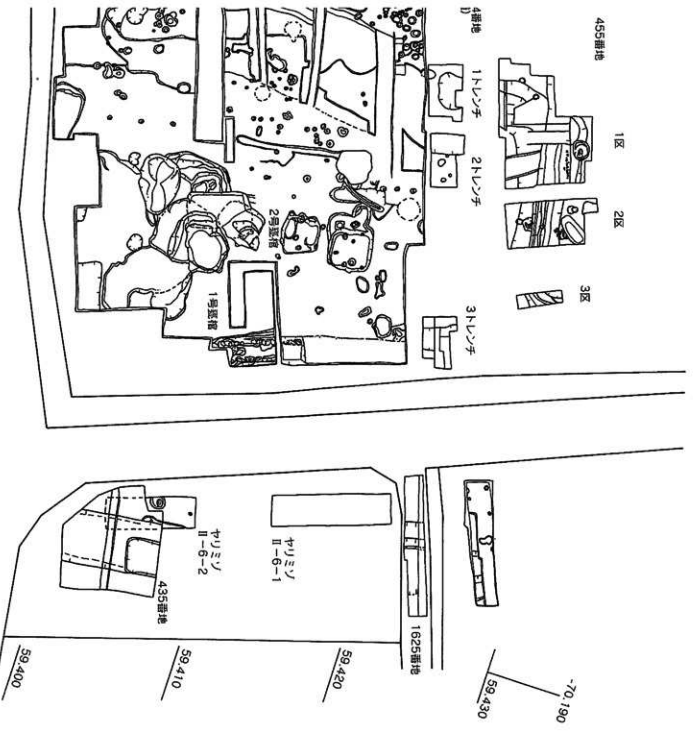
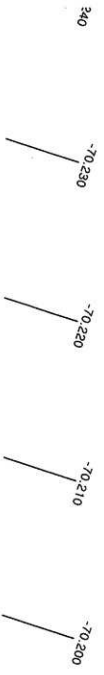
発 行 前原市教育委員会
福岡県前原市前原西一丁目1番1号
TEL 092-323-1111

印 刷 (株)重富印刷
福岡県前原市前原東三丁目1番8号
TEL 092-322-0191 FAX 092-324-2661



上層 1-1

附圖 三號房小器佈置圖



敷地所在位置図 (1/250)